

久留米市善導寺町木塚

木 塚 遺 跡

久留米市文化財調査報告書

第 14 集

(弥生時代前期の墳墓と前方後円墳の複合遺跡)

1 9 7 7

久留米市教育委員会

久留米市善導寺町木塚

木 塚 遺 跡

久留米市文化財調査報告書

第 14 集

(弥生時代前期の墳墓と前方後円墳の複合遺跡)

1 9 7 7

久留米市教育委員会

序

1960年～1970年初期にかけてをピークとする経済成長政策は、日本を自由主義国第二のGNPを誇る国として位置付け、国民の生活も物質的な面において確かに向上させ豊かにしました。しかしその反面、大型開発事業を軸とするこれらの成長策は、山や森から緑を奪い、海、川や大気を汚染させ人類の生存出来る環境に大きく制限を加えました。

文化財（歴史的文化環境）は、祖先が残した生活の知恵の結果であり、現代に生きる私達の実生活に多くのがゆを与えてくれる貴重な資料ですが、これらの文化財も、大型開発事業等によって多大な破壊を受けてきました。

水と緑の豊かな田園都市久留米も九州縦貫自動車道、都市基盤整備、農地整理等の開発事業で、大きく変貌しています。この為自然環境はもとより、歴史的な文化環境である史跡や埋蔵文化財の破壊は、急激に増加し、開発か保護かという極めて深刻な形で社会問題化しています。

木塚遺跡の所在する善導寺町も年々宅地造成が進み、遺跡の破壊も数を増して来ました。木塚遺跡は宅地造成に起因する開発に先立って発掘調査を実施したものでありますが、弥生時代前期の墳墓と前方後円墳の二つの時代の墓制が重複した遺跡である事が判明し、善導寺町一帯の古代の歴史を解明するうえで、重要な価値を持つ事が確認されました。

ここに文化財調査報告書第14集を発行し、記録を公開する事となりましたが、本報告書が筑後地方の研究資料として、あるいは文化財保護思想の普及に役立てていただければ幸いです。

2年にわたる長期の発掘調査に協力していただいた所有者の方々には序文を借りて御礼を申し上げます。

昭和32年3月31日

久留米市教育委員会

教 育 長 安 元 忠 男

例 言

1. 本報告書は、第1次調査を昭和50年11月5日から12月27日まで、第2次調査を昭和51年10月6日から12月27日まで実施した。久留米市善導寺町木塚字本村内畑の宅地造成に起因した埋蔵文化財の報告書である。
2. 発掘調査は、久留米市教育委員会が主体となり、第1次調査は文化担当の萩原裕房、横尾義明、第2次調査は、文化担当の横尾義明が担当した。
3. 本報告書の執筆分担は、下記の通りである。

第I章		横 尾 義 明	
第II章		*	
第III章	1・3	*	
	2	萩 原 裕 房	
第IV章	1・2	横 尾 義 明 ・ 西	健一郎
	3	西	健一郎
第V章		横 尾 義 明	
4. 遺跡・遺物の写真撮影は、横尾義明、萩原裕房が担当した。実測図の作成は挿図目次に示した。
5. 本書の編集は横尾義明が担当した。
6. 木塚遺跡出土遺物、図面は久留米市諏訪野町の文化担当分室、文化財資料室（中央公民館内）に展示、保管している。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	
1	調査の経過と概要	6
2	発掘調査の組織と構成	8
3	木塚遺跡の立地と周辺の遺跡	9
第Ⅱ章	発掘調査の概要	
1	発掘区の層位	12
2	発掘区のトレンチ	12
第Ⅲ章	出土遺構	
1	弥生時代	
	(1)土墳墓	16
	(2)木棺墓	18
	(3)石棺墓	20
2	古墳時代	
	(1) 木塚古墳	22
	(2) 石室構造	24
	(3) 埴輪	27
	(4) 須恵器	32
3	中世	
	(1) 大溝	36
	(2) 貯蔵穴	38
	(3) 柱穴、ビット群	39
第Ⅳ章	出土遺物	
1	縄文式土器、石器	41
2	弥生式土器	43
3	中世遺物	49
第Ⅴ章	ま と め	54

挿 図 目 次

Ⅳ

第1図	木塚遺跡周辺の遺跡分布図（横尾義明作成）	10
第2図	木塚遺跡全体図（横尾・藤田美佐子・一富州子・藤田製図）	折込み
第3図	木塚遺跡土層図（近沢康治実測・藤田製図）	13
第4図	T-O土層図（横尾・藤田・一富実測・藤田製図）	13
第5図	第1号土墳墓・第2号土墳墓（横尾実測・製図）	17
第6図	第1号土墳墓出土遺物（横尾・西健一郎実測・藤田製図）	18
第7図	第1号木棺墓・第2号木棺墓（横尾実測・製図）	19
第8図	第1号石棺墓・第2号（石蓋）石棺墓（横尾実測・製図）	21
第9図	トレンチB・C地層断面図（近沢実測・藤田製図）	22
第10図	石室平面実測図（萩原裕房実測・藤田製図）	23
第11図	木塚古墳石室実測図（萩原実測・藤田製図）	折込み
第12図	石室プランの方眼による操作結果（萩原実測・藤田製図）	25
第13図	木塚古墳復元推定図（萩原作図）	26
第14図	埴輪実測図①（萩原実測・藤田製図）	28
第15図	埴輪実測図②（富永直樹・林恵子実測・藤田製図）	29
第16図	埴輪実測図③（富永実測・藤田製図）	30
第17図	須恵器実測図①（萩原実測・藤田製図）	32
第18図	須恵器実測図②（鹿子島愛里実測・藤田製図）	33
第19図	白玉実測図（萩原実測・藤田製図）	34
第20図	中世大溝土層図（横尾・藤田実測・藤田製図）	36
第21図	貯蔵穴1・2（松村一良・横尾実測・藤田製図）	37
第22図	ピット1・2・3（藤田実測・製図）	39
第23図	T-Lの瓦器、青磁、白磁出土状態図（横尾実測・製図）	39
第24図	縄文式土器（横尾実測・製図）	42
第25図	石器（横尾実測・製図）	43
第26図	弥生式土器①（西実測・藤田製図）	44
第27図	弥生式土器②（西実測・藤田製図）	45
第28図	弥生式土器③（西実測・藤田製図）	46
第29図	弥生式土器④（西・横尾実測・藤田製図）	48
第30図	中世遺物①（西実測・藤田製図）	53
第31図	中世遺物②（西実測・藤田製図）	54
第32図	中世遺物③（西実測・藤田製図）	55

図 版 目 次

- 図版 1 (1)木塚遺跡遠景 (2)木塚遺跡近景
- 図版 2 (1)第 1 号土墳墓 (2)第 1 号土墳墓完掘
- 図版 3 (1)第 1 号木棺墓掘り込確認 (2)第 1 号木棺墓完掘
- 図版 4 第 1 号石棺墓 (2)第 2 号 (石蓋) 石棺墓
- 図版 5 (1)木塚古墳石室 (2)木塚古墳石室
- 図版 6 (1)T-S 北側くびれ部 (2)T-G 南側くびれ部、土墳墓で攪乱
- 図版 7 (1)後円部周溝、家形埴輪、須恵器出土状態 (2)T-P 前方部周溝、武人、馬形埴輪出土状態
- 図版 8 (1)T-M、後円部周溝と中世貯蔵穴 (2)T-L、前方部周溝と中世大溝
- 図版 9 (1)T-L 前方部周溝と中世大溝の切り合い (2)大溝中の昭和初期の溝
- 図版 10 (1)T-L に流れ込む溝 (2)T-L、ピット、柱穴
- 図版 11 (1)中世包含層出土の樽形埴 (2)樽形埴
- 図版 12 (1)T-I、中世大溝と昭和年代の大土墳 (2)T-I、昭和年代の大土墳
- 図版 13 (1)T-G、土墳墓群
- 図版 14 (1)木塚遺跡出土縄文式土器
- 図版 15 (1)木塚遺跡出土の石器、石片、(2)第 1 号土墳墓出土の弥生式土器
- 図版 16 (1)木塚遺跡出土の弥生式土器
- 図版 17 (1)木塚遺跡出土の弥生式土器
- 図版 18 (1)木塚古墳周溝出土の形象埴輪
- 図版 19 (1)木塚古墳周溝出土の形象埴輪
- 図版 20 (1)木塚古墳出土の形象埴輪 (保管分) (2)T-A 周溝出土の家形埴輪 (3)木塚古墳周溝出土の特殊埴輪
- 図版 21 (1)須恵器、器台 (2)須恵器、壺
- 図版 22 (1)分銅と石鍋 (2)白磁、青磁
- 図版 23 (1)瓦器 (2)雑器
- 図版 24 (1)小皿

第1章 はじめに

1. 調査の経過と概要

本遺跡は、昭和の初め頃木塚古墳として確認され広く知られていた。今回の2度にあたる調査で縄文時代の土器、石器、弥生時代の墓地、前方後円墳1基、室町時代の大きな溝、近世の墓場などが複合する遺跡であることが判明したので、「木塚遺跡」の名称を用いる。

本調査は、久留米市善導寺町木塚字木村内畑614の所有者■■■■氏の宅地造成計画に起因する緊急調査である。木塚古墳については、以前から本格的調査が望まれており、昭和50年10月31日、■■■■氏等は、文化財保護法第57条2に基づく発掘調査届を提出された。

久留米市教育委員会文化担当は、国、県の指示を得て、第1次調査を昭和50年11月5日から同12月27日まで51日間、第2次調査を昭和51年10月6日から同12月27日まで83日間、国庫補助費で発掘調査を実施した。

木塚古墳は、昭和25・28年の開墾や筑後川の決壊による堤防工事で盛土のすべてを削りとられ石室が露出している。石室は、初期の横穴式石室の様相を持ち、墳形は、削平前の観察によれば、前方後円墳の可能性が強かった。『善導寺町誌』には、「本古墳の原形は、家や開墾の為にひどく壊されているが、全長80mの段丘があり、豪族の邸をそのままに、周囲に濠をめぐらしていたようで、前方の南端に幅20m深さ0.5mのものが残っている。」(注1)と記されている。土掘りの際には円筒埴輪が整然と並んで発見され、朱塗りの家、藁の形象埴輪片も出土したと伝えられている。副葬品は、盗掘などを受けているためあまりはつきりしないが、鹿角製刀装具、刀子などが出土したと伝えられる。(注2)

木塚古墳は、筑後川左岸の自然堤防上に立地した数少ない平野部の前方後円墳である。浮羽町の日ノ岡古墳、月ノ岡古墳、吉井町の塚堂古墳は残された同例の貴重な古墳である。本古墳によく類似した塚堂古墳は、前方部に横穴式石室、後円部に堅穴式石室が営まれていたが、開墾で後円部を削平されて前方部だけが残っている。日の岡、月の岡古墳は、国の指定を受けて保存されている。

木塚古墳は、石室が露出し一部は破壊されているものの石室の構造をよく残し、周溝の保存状態もよく、周溝内には数多くの墳丘にめぐらした埴輪、祭祀用の須恵器が転落している。墳丘下には、弥生時代の墓地が広範囲に完全な形で残り、一部には、縄文時代の住居址が残存している可能性もあり、木塚一帯の古代の歴史を解明する好資料である。より良い保存方法があるのではないかと文化財保護の方向で検討中である。

木塚遺跡の保存を求めた文章は昭和49年の九州考古学49・50で佐田彦氏が初期横穴式石室の

構造を考える上で石室構造に特色のある木塚古墳は重要であり、弥生時代の墓制と古墳が複合して墓制の変遷を知る上でも重要だと学問的な立場から保存を求めるとともに、古墳を保存することは地域文化の発展にも大きく寄与するものであると保存を強調されている。(注3)

第1次調査は、後円部の範囲確認を目的に石室を中心にトレンチを放射線状に5本、周溝外堤確認に3本設定した。トレンチには、ABCを用い、T-A、T-Bと略す。第2次調査では、前方部の確認を行なったが、前方部周溝が家屋の真下であり十分な成果は得られなかった。木塚古墳は現存で全長約48m、後円部径32m、周溝幅16m、周溝深さ1.2mの前方後円墳で石室の構造と共に特徴を有する。

古墳の盛土削平の際、弥生時代の甕棺、箱式石棺が出土したと伝えられるが、弥生時代の墓地との複合遺跡と考え、第1次調査ではトレンチ内で古墳盛土下の弥生時代の墓地10基を確認した。墓地は、東側の台地縁辺部に集中し、西側ではみられなかった。東側の端辺部が、木塚の台地で最も高い東側を中心に墓地として利用している。遺跡の内訳は、土坑墓3基、(内2基は不明)、木棺墓2基、石棺墓5基(うち石蓋石棺墓1基)である。第1号土坑墓は3個の小形甕形土器を供献しており弥生時代前期後半の土坑墓と思われる。第1号石棺墓も出土遺物から前期後半の時期と思われる。他の遺構は、時期を決める遺物がなかった。筑後地方では例の少ない弥生時代前期後半の墓地は予想外の発見であった。

調査区の北側には、一部古墳の周溝を利用した室町時代の大溝が、西から北東方向に流れる。大溝は、昭和時代に再利用され擾乱を受けているが、底部付近はプライマリーな状態で残存していた。T-Iでは、北側から流れこむ溝があり、排水溝として利用されていたと考えられる。大溝の付近には、柱穴やピットなど生活遺構がみられる。『善導寺町誌』に記されている外形80mというのは、この大溝を見誤ったと思われる。この時期の遺物は、西側、南側の畑にも散布しており、中世の散布が濃厚な善導寺台地と向い合った木塚台地との位置的関係が興味を持たれ、数多くの遺跡が存在すると思われ今後の発掘に期待したい。

T-Gの古墳くびれ部付近で確認した13基の土坑墓は、伴出遺物から明治時代頃と思われる。この時期には、古墳を削平して墓地として利用していたと思われる。

(注1) 善導寺町誌、昭34.8

(注2) 鹿角製刀装具、形象埴輪等を、田中幸夫氏が保管されておりここに紹介する。

(注3) 「福岡県久留米市善導寺の木塚古墳」佐田茂 昭49.3

2. 発掘調査の組織と構成

調査の組織と構成は下記のとおりである。

第1次調査

調査責任者	久留米市教育委員会		
	教育長	吉 武	不二男
	文化担当主幹	大 石	繁
	文化財係長	塚 本	直 次
	庶 務	堤	諭 吉
調査担当者	久留米市教育委員会		
	文化担当	萩 原	裕 房
	文化担当	横 尾	義 明

発掘調査関係者

近沢康治（福岡大学）、林恵子（別府大学）、宮原久栄
中垣隆、今村勝美、甲カスミ、甲カズ子、木築ツユ子、小屋松イツエ、小屋松千代香、
小屋松マサ子、高木ハツエ、田中タツエ、中垣千枝子、中垣トリ子、中山京子

第2次調査

調査責任者	久留米市教育委員会		
	教育長	安 元	忠 男
	文化担当主幹	大 石	繁
	文化財係長	塚 本	直 次
	庶務	中 尾	博
調査担当者	久留米市教育委員会		
	文化担当	横 尾	義 明

発掘調査関係者

藤田美佐子
中垣隆、一富州子、鹿子島ミナト、甲カスミ、木築ツユ子、小屋松イツエ、小屋松マサ子、高木ハツエ、田中サダ子、中垣カズエ、中垣シメヲ、中垣千枝子、古賀正美（整理）
藤田美佐子、古賀千鶴子、俣野たみ子、稲員道子、林 恵子、鹿子島愛里

3. 木塚遺跡の立地と周辺の遺跡

日田盆地を源とする筑後川は、東から西に蛇行しながら、宝満川、大刀洗川などの支流を集めて、耳納山地西端の久留米市長門石町付近から南西方向に流れを変えて佐賀平野を潤し有明海に注ぐ。耳納山地を源とする河川は小規模で浸蝕作用はみられるが、堆積作用はあまりない。筑後川は上流からの土砂の堆積による自然堤防を兩岸に形成する。木塚遺跡はそういった自然堤防上の最高地点に立地した遺跡である。

佐賀平野、筑後川流域の沖積地に形成された弥生時代の貝塚は、海岸平野の形成過程を知る貴重な手掛りになる。だが、縄文時代の貝塚が、まったくみられないことから、筑後川の沖積が平野部に及んだのは弥生時代以降で、縄文時代には北野平野まで沖積が進んでいたと考えられる。(注1)

木塚付近の自然堤防上の集落としては勿体島、与田、古北、太郎原があり、対岸には、鳥巢、高良、中島がある。筑後川は幾度も流れを変え現在に至っており、自然堤防を削っている可能性も十分にある。現在でも筑後川の砂利採りで磨滅の少ない完形の弥生式土器が有機質土から出土している。(注2)

自然堤防上の分布調査はまだほとんど行なわれておらず、縄文時代の散布地は耳納山地山麓の草野町春遺跡(中期、並木式土器)、山本町落間遺跡(完形の岡頭石棒)が知られている程度である。弥生時代の遺跡は、古北と鳥巢の間の筑後川川底から出土した壺形土器は口唇部を欠くがほぼ完形で、口縁部は外反し、肩部と頸部との間に明確な変化はなく胴部は丸味が強く底部は、やや凹んだ平底である。時期は前期後葉と考えられる。(注3)山麓部では草野町 春遺跡から前期、中期の壺形土器が出土しており、山麓部にも前期から生活の跡が認められる。春遺跡の北方、大屋敷遺跡からは、後期の甕棺、箱式石棺が出土し、高地に墓地を造ったと考えられる。浮羽町、吉井町、田主丸町の自然堤防上には、弥生時代前期から後期の遺跡が数多く確認されている。(注4)

右墳時代には、自然堤防上に前方後円墳が出現する。時期的に最っとも古いと思われる吉井町日ノ岡古墳は全長95mで後円部に長持形石棺を納めた竪穴式石室が文化2年(1805年)に発見された。短甲、肩沓付冑などが出土し、畿内的要素を強く持ち、5世紀前半から中葉の時期と考えられている。月ノ岡古墳の東方約600mに塚堂古墳がある。全長78mで前方部に横口式石室を後円部に竪穴式石室を築いた。竪穴式石室からは武具、馬具、多数の玉類が出土。横口式石室からは短甲3、甲1、仿製神祇鏡1、長刀9、貝剣1などが出土している。石室は長方形プランで、羨道部はなく中央の入口は狭い。時期は、5世紀末頃と考えられている。日ノ岡古墳は、月ノ岡古墳と共に若宮八幡宮境内にあり、全長74mで後円部に横穴式石室をもうける。石室は、板石積みの胴ふくらみで全面に三角文、同心円文などの装飾文様



を描いている。時期は、6世紀中葉と考えられている。木塚古墳は、墳形石室の構造などから塚堂古墳と月ノ岡古墳の間に位置づけられる。

この平野部の古墳は、耳納山地北麓の群集墳と好対象をなしている。だが、耳納山地北麓の古墳群には5世紀末～6世紀初頭の古墳は現在まで確認されていない。

中世の遺物は飯田、与田を中心とした台地上に広く散布している。遺構が確認されたのは発見島遺跡の井戸址、溝がある。井戸址は円形プランで直径2.3m、深さ約4.5mで井戸底には扁平な河原石を平積み敷き径1.5mであった。井戸内からは輸入青磁、土師器、瓦、白漆が出土した。井戸の周囲には、幅1mのV字溝が走っていた。井戸址の時期は室町時代と考えられる。(注5)、木塚台地にも西側の端辺部に濃く分布する。木塚遺跡周辺の分布調査でも数多くの中世遺物が散布している。対岸の善導寺台地との関連は、今後の課題となる。

注1. 山崎光夫『九大教養部地学研究報』第4冊「有明海を主体とする北九州の沖積世(新石器時代)」

注2. 筑後川の長門石橋から、橋一帯の砂利採りの際出土。

注3. 西建一郎「筑後川川底出土の土器1」『筑後考古』第2号、昭51. 9

注4. 田中幸夫「考古学が語る古代浮羽の幻想(上)」『筑後考古』第4号、昭51. 12

注5. 1974年12月11日山本郡桑里の発掘、市教委、樋口一成氏教示。

第Ⅱ章 発掘調査の概要

1. 発掘区の層位 (第3図)

木塚台地は、東西に延びる自然堤防で東端の最高地に遺跡は立地する。東側端部での水田比高差は約1mである。遺跡は、開墾等で著しく変貌している。

1層は耕作土で、弥生式土器、埴輪片、土師器を混入している。2層は、地山の砂を多く含む明褐色砂質土層で黄色ロームを小ブロックで混入する。3層～6層は、大溝を再利用した昭和期の溝。T-Aで最っとも深く東側に流れる。埋土は暗茶褐色砂質土層で下部は黄色が強い。溝内には茶碗、ガラス片、瓦片が出土した。7～13層は室町時代の大溝内の埋土で上部は褐色の砂質土で、下部は小礫を混入した黄茶色粘土質土層で最下部は有機質の黒灰粘質土層である。15～24層は、木塚古墳の周溝埋土で黒色の有機質土を主体とする。黒色粘質土層は、茶褐色地山に自然堆積した層で、古墳の盛土として利用され周溝に流れ込んだと考えられる。周溝底部の24層は堅く、家形埴輪、須恵器片や葺石と思われる扁平河原石を包含している。

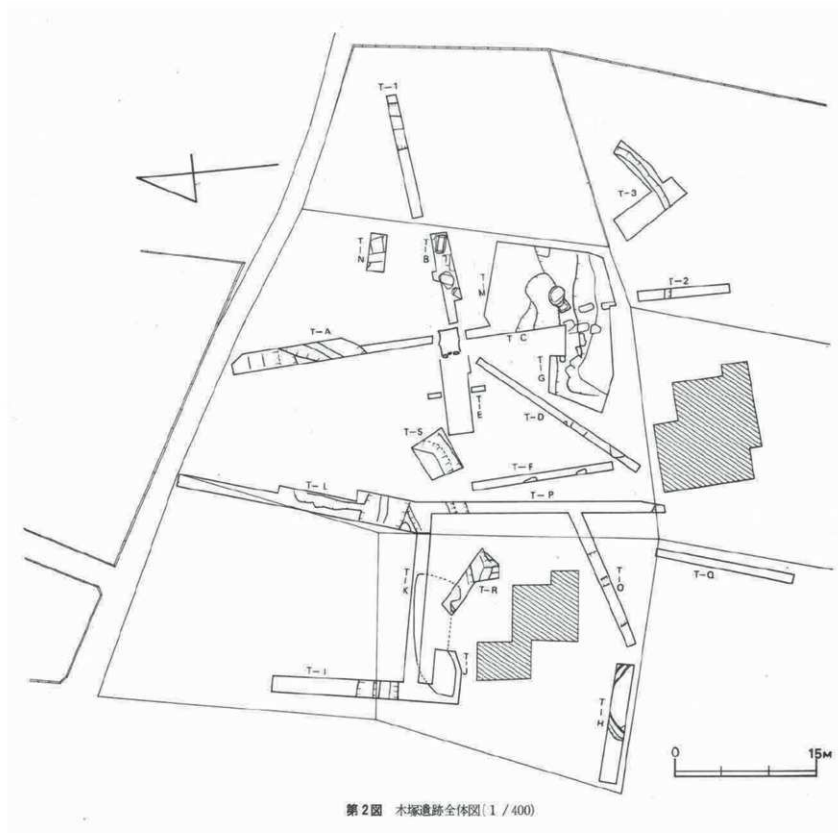
図示したT-Aでは黒色有機質土が遺構で削平されているが、T-Cなどでは縄文式土器、弥生式土器を包含していた。下部にはプライマリーな土層が残る。弥生時代の遺構はこの黒色土層から掘り込まれている。

2. 発掘区のトレンチ (第2図)

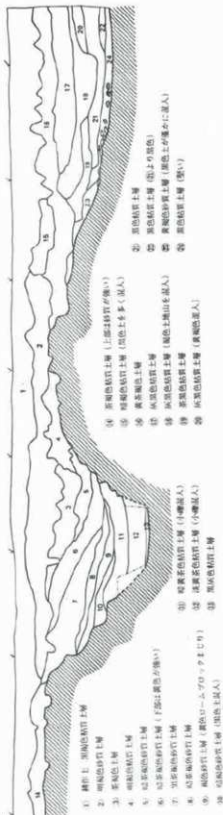
調査は石室を中心に5mの方眼を組み、北から時計まわりに、トレンチA、B…(略T-A…)を設定し、その後は順次番号をつけた。予定外のトレンチは、T-1、2、3とした。T-H以降は第2次調査。

T-Aは、道路際まで設定し、北側で後円部周溝を確認したが、反対側の立ち上りは道路で調査出来ず。周溝は、南側がなだらかで北側は急に立ち上がる。周溝内から丹塗り家形埴輪台部、須恵器が出土し、葺石が貼り石と考えられる扁平な河原石の流れ込みがみられた。現存の周溝の深さは1.6m。南側周溝の一部は、室町時代の大溝で一部を切られる。大溝は埋った段階で、昭和初期に溝として利用されている。大溝は、現存で幅約6m、深さ2.6m。

T-Bは、盛土が20cm残り、盛土下で弥生時代前期の土壇墓1、木棺墓1、石棺墓4を確認した。土壇墓と木棺墓は完掘。石棺墓は古墳時代の掘り込みで2基が攪乱され、石材が散乱していた。東北隅にも遺構らしきものがある。石室付近には、版築の盛土が観察でき石室付近



第2図 木塚通跡全体図(1/400)



第3図 本塚遺跡土層図(1/400)



第4図 T-O土層図(1/400)

の為、特に緊密であった。

T-Cは、南端で後円部周溝を確認した。周溝は、3基の時期不明土壌墓でできられている。黒色土から縄文時代前期の曾畑式土器を多く出土した。

T-Dは、周溝確認の為、斜めに設定したが、周溝にはかからなかった。古墳の盛土下で弥生時代の木棺墓1を検出した。また室町時代と考えられる北壁に石を貼り付けた遺構を検出した。黒色土から曾畑式土器が出土した。

T-Eは、石室の羨道部確認の為に設定した。石室の前に置かれている石は、後に置かれたものである事が判明したが、羨道部の有無は攪乱の為確認できない。黒色土上で弥生時代後期後半の土器を3個体分と焼土を2ヶ所で検出した。限られた範囲の発掘では性格は判明できなかった。

T-Eは、盛土下に弥生時代の石蓋棺墓1、土壌墓(?)1を検出した。黒色土上部から弥生時代後期前半の長頸壺形土器と球状胴部の土器が出土した。

T-Gは、くびれ部を確認する為に設定した。T-Cで確認した周溝を延長したが、くびれ部付近は時期不明の土壌墓11基で大きく攪乱を受けて前方部の延びは明確に出来なかった。北側には土壌墓を切った溝がみられた。

T-1.2.3は、後円部周溝の外側を確認の為に設定した。T-1は、台地の東側端部で削平を受けた可能性もあり、後円部周溝は欹かった。現存幅 4.7m深さ1.2m。T-2.3は耕作の為に深く削平を受けている。北側には 周溝らしき溝があるが、この溝は最近まであった溝と考えられる。

T-Hは、第2次調査の目的である前方部確認の為に設定した。室町時代の円形周溝を検出したが性格は不明。西側は、昭和期の溝が2本重複していた。

T-Iでは大溝と周溝の関係を確認しようとしたが周溝にはかからなかった。北側では、室町時代のピット1.2と弥生時代と考えられる溝の1部を確認した。大溝は西から東に流れ墓地付近から北東に流れると考えられる。大溝はT-A同様、昭和初期に再利用されている。

T-J、Kは、昭和初期の大土壌の範囲確認の為に設定した。大土壌な、長方形に近く長さ12.5m、幅 2.5m (最大で 5.0m)、深さ 2.1 mで大規模な遺構である。最下部からは茶碗が出土している。

T-Lは、室町時代の大溝と前方部周溝の切り合い関係と大溝に流れこむ排水用と考えられる溝を確認した。北側には、最近の境界溝がある。大溝は、周溝を切っており、南側には瓦器、青磁が散布し、柱穴と考えられるピットを4個検出した。大溝は昭和初期に再利用され吉田家の古瓦、日常品が投げ込まれていた。西側のピットは、弥生時代の遺構である。

T-Mは、後円部周溝と室町時代の貯蔵穴、弥生時代の石棺墓1基、時期不明の土壌墓2基を確認した。盛土下から一部出ている石棺墓は上面確認にとどめた。

T-Nは、所有者が耕作中に石棺と思われる板石を掘り出し、緊急に設定した。遺構は弥生時代の木棺墓1、石棺墓1と土壌の一部であるが、遺構は確認だけで発掘せず埋め戻した。

T-Oは、前方部周溝確認の為に設定したが、室町時代と昭和初期の溝で周溝が完全に消滅していることを確認した。室町時代の包含層から須恵器の樽形甕が出土した。井戸は途中で放棄した。

T-Pは、盛土の残存状態と北側と南側で周溝を確認する為設定した。北側は、T-Lを延長して周溝を両端で確認した。周溝は南側でなだらかに落ち北側は急に立ち上がる。周溝内から丹塗りの武人埴輪、馬の埴輪が出土した。上部からは須恵器の大型器台が出土している。盛土は40cm～50cm現存している。南側は昭和初期の溝で削平されている。

T-Qは、擾乱された昭和期の溝が深く続いている。

T-Rは、前方部周溝の延長を家屋近くまで求めたが、植木の為にコーナーまで延長出来なかった。周溝の内側には段がある。土壌は弥生時代の遺構である。

T-Sは、北側くびれ部確認の為に設定した。北側くびれ部は擾乱も受けず、ほぼ予想通りに検出できた。周溝内から丹塗りの埴輪片が多数出土した。

木塚遺跡の行事・説明会

発掘と併行して下記の行事を地元を対象におこないました。

昭和50年12月4日 善導寺公民館と協力して「木塚遺跡について」を木塚、古北の全戸96世帯に配布する。

12月8日 善導寺小の5、6年生全員に社会の郷土の歴史の材料として発掘現場でパンフレットを作って説明をおこなう。

12月13日 翌日の現地説明会に備えて、木塚公民館で午後7時よりスライド会を2時間おこなう。パンフレットを作成。参加者約40人。

12月14日 午前10時より発掘現場で説明会をおこなう。有線放送や新聞で通知していたので地元を中心に多くの人が参加された。約50人。

その他に久留米郷土研究会の遺跡見学会(12月9日)をおこなった。

昭和52年11月1日～7日の第2回考古資料展に第1次調査分の資料、遺構写真を展示。

昭和52年12月18日 午後1時から発掘現場で説明会と遺物の展示をおこなう。有線放送の通知で地元を中心に約60人が参加。パンフレットを作成。

善導寺公民館の公民館報「げんどうじ」に数回にわたり、木塚遺跡の説明文を寄稿して地元への理解浸透と普及をおこなった。

第Ⅲ章 出土遺構

1. 弥生時代の遺構

(1) 土墳墓

第1号土墳墓(第5図)

T-Bの中央部にあり発掘。主軸をN-22.5-Eに向け、長さ169cm、幅138cm、深さ35cmに長方形プランを掘り下げる。墓底面はほぼ平坦であるが、南側でやや低い。プランが定形なので木棺の可能性も検討した。埋土は北側にソフトな部分があったが、山まで下げても掘り込みなどはみられなかった。西側に84×18cmのテラス状平坦部をもち、その上に2個の小形壺形土器が北方向に倒れて出土した。2個の土器は、ある程度埋め戻した段階で副葬品として供えたと思われる。羽状彩文土器は、土壇墓の中央部に置かれ底面から47cm浮いていた。埋土の状態など2個の土器と同じ副葬品と思われる。底面から50cmぐらい浮いた埋土内に自然石が多く出土した。他のレベルにはみられなかった。意図的なものか判断は難しい。埋土中から弥生式土器片8、縄文式土器片2、石鏃2、自然石、黒曜石14を検出した。

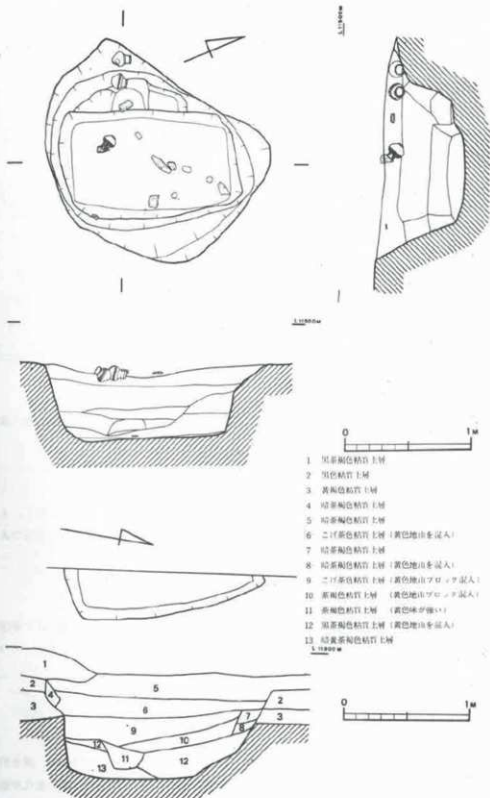
出土遺物(第6図1~6)(第26図6.9)(第25図2.3)

1は口縁部がゆるやかに外反しやや膨らむ、頸部から胴部にかけてはなだらかになり、内側に明確な接合部はないが、わずかに痕跡が残る。最大径は、中央部にあり底部が口径より小さいので横に平たい感じがある。施文は、口縁部下に沈線をめぐらし、肩部は上下2本の沈線文で区画後に12連の三重弧文を描く。研磨は内外とも横研磨である。土器はやや歪んでいる。口径7.1cm、高さ11.6cm、底径4.1cm。

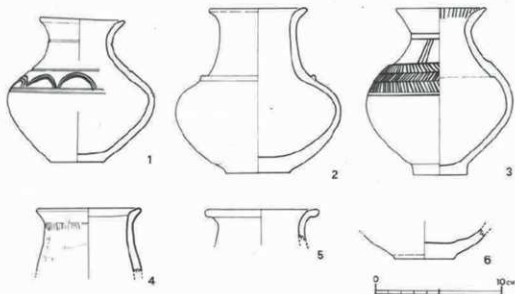
2は頸部が極めて長く垂直に立ち上り、口縁部は急に外反する。肩部に貼り付けの丸味を持った山形突帯がめぐらされる。接合部は内側にもなくなる。最大径は中央部にあり、胴部は強く張る。底部はやや広く平底である。研磨は横研磨で非常に丁寧におこなわれる。口径7.8cm、高さ13.0cm、底径5.0cm。

3は、丹塗彩文土器で口縁部、頸部、胴部、底部の各部分が明確で古い要素を残す。口縁部は短く外反し、先端が細くなる。頸部はしまり球状の胴部につながる。胴部は最大径がやや上にあり、球状に強く張り円盤貼り付けの底部に至る。底部は中央部がわずかに高い。全体に均整のとれた土器である。接合部は内側に明確にみられ、刷毛目調整後に接合している。彩文は口縁部下に2本めぐらし、頸部には3本の縦線を4ヶ所に施文。肩部には上下を区画後に斜線を描き有軸を施文する。口縁部内側にも施文。口径7.1cm、高さ13.2cm、底径4.3cm。

4は、頸部が長く垂直に立ち上り、口縁部は強く外反し、内側に縦線を有する。調整は縦



第5図 第1号土壇墓(上)、第2号土壇墓(下)(㊦)



第6号 第1号土壌墓出土遺物(古)

の櫛整形後に横なで調整を行なうが、一部に櫛目が残る。内側の一部には指圧痕も残り調整が入念に行なわれない。

5は口縁部が大きく外反し、先端部が丸味をおびる。削りとした平坦面がみられる。

6は円盤貼り付けの要素を残す底部。外側は横研磨。内側はなで調整。

1、2は弥生時代前期後半の時期に属するが、3は板付Ⅰ式の古い様相を強く残す。4～6は埋土内出土の土器で前期後半と考えられ、第1号土壌墓の時期はこの時期が妥当であろう。

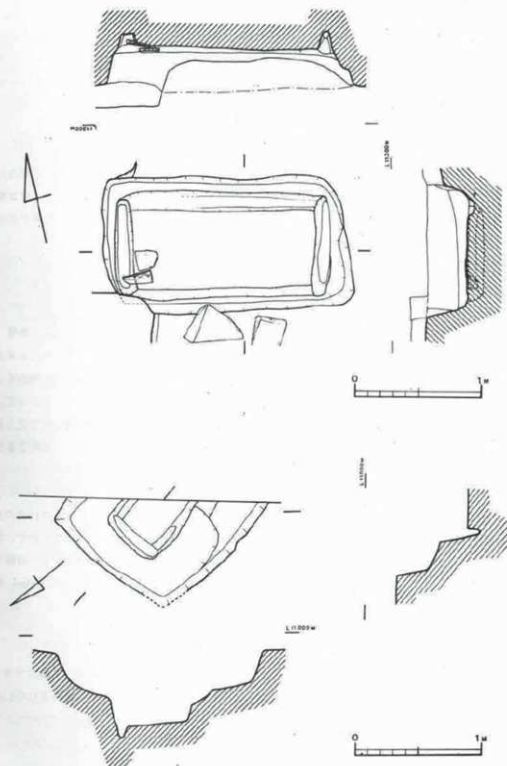
第2号土壌墓(第5図)

T-F内に発掘を限ったので完掘ではない。長軸 152cm、短軸現在42cm、深さは土層図でみると65cmで基盤より26cm上から掘り下げている。出土遺物もなく時期は不明、未掘であり木棺墓の可能性も残す。

(2) 木棺墓

第1号木棺墓(第7図)

T-B東側に位置し完掘。主軸をS-77.5-Eに向け、長さ 195cm、副 104cm、深さ37cmの長方形プランの墓壇を掘り、墓壇いっばいに木棺を埋置する。埋土中で土質の変化が認め



第7号 第1号木棺墓(上)、第2号木棺墓(下)(a)

られなかったので埋土を取り除き地山を出す和小口板、側板を立てた掘り込みを検出した。埋土はやわらかく、東西の小口部が深く79×12×14cm、75×15×9cmで側板の掘り込みは南側は浅い。木棺は小口板と側板がかみあった箱型で、棺の内径は長さ152cm、幅70cm、深さ15cm。地山面はほぼ平坦だが西側で低く、西側小口部の2枚の桐葉母片岩は底面の平坦調整の為に底板の下に敷いたと思われる。埋土中より小片の弥生式土器が出土した。

第2号木棺墓（第7図）

T-Dの南端にあり完掘でない。主軸はN-10°-Wを向き、短径110cm、長径は（現在）118cm、深さは（現在）26cmの墓域を掘り下げ、その中央に木棺墓を埋置する。木棺は幅48cm、長さ（現在）63cm、深さ22cm。東側の側板掘り込みは床面より9cm。西側では小口部で浅くみられるがほとんどない。出土遺物はない。

（3）石棺墓

第1号石棺墓（第8図）

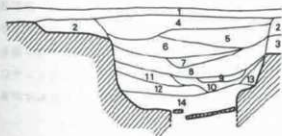
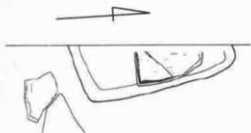
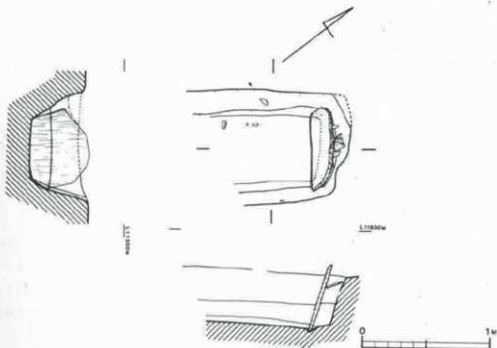
T-B西側にあり南側は未掘。主軸はN-38°-Eを向き、土壌プランは短径85cm、長径（現在）128cmの長方形を呈す。小口部には幅66cm、高さ55cm、厚さ3cmの大きな1枚石を床面を3cm程度掘り下げて斜めに立てかけ、その後部には、土と共に小口割りの石片を詰める。側壁部には、当然側板を使用したと思われるが、木板を立てる掘り込みはみられなかった。南側は未掘であるが、小口部には、北側同様に立石があると思われる。西側壁に弥生式土器片が密着していた。発掘した埋土内より縄文式土器、弥生式土器片6、石鏃1、石片2を検出した。また壁中、床面下のローム層中より黒曜石片1を検出した。

出土遺物（第27図17）（第25図1）

弥生式土器片はいずれも小片だが、うち2片が第27図17の一部である。丹塗りの19連の重弧文土器で第1号石棺墓に伴う副葬品と思われる。頸部から胴部にかけてはなだらかで、埴に3本の沈線めぐらし区画する。最大部に3重の重弧文を施文する。器壁はうすく研磨も横研磨を丁寧におこない焼成も良好である。内側の研磨はやや雑である。最大径25.0cm。時期は前期後半と考えられる。

第2号（石蓋）石棺墓（第8図）

T-Dの南側にあり、主軸をほぼ東西に向けられると思われるが、西側は未掘。土壌のプランは長方形であるが、短径123cm。石棺はほぼ東西を向く長方形で、2枚の石蓋の下に小口部の立石がみられる。石棺の幅は43cm。埋土内からの出土遺物はない。



- 1 瓦葺彩色粘土土層
- 2 彩色粘土土層
- 3 黄褐色粘土土層
- 4 黄褐色粘土土層 (ぎらつく)
- 5 暗茶褐色粘土土層 (灰色土を混入)
- 6 黄褐色粘土土層 (黄色地山を混入)
- 7 暗茶褐色粘土土層
- 8 暗茶褐色粘土土層 (黄色地山多い)
- 9 黄褐色粘土土層 (黄色地山を多く混入)
- 10 暗茶褐色粘土土層
- 11 暗茶褐色粘土土層
- 12 暗茶褐色粘土土層 (黄色地山混入)
- 13 ニケ灰色粘土土層
- 14 暗茶褐色粘土土層 (ややぎらつく)



第8号 第1号石棺墓(上)、第2号石棺墓(下)(並)

2 木塚古墳

(1) 古墳の構造と形態

本墳は、筑後川左岸の標高約11mの自然堤防上に位置する前方後円墳である。封土はすでに削平され、石室は露出し、一部破壊された状態である。第1次・第2次の2回にわたる調査によって検出された遺構のうち、古墳と直接関連するものを取り上げて述べることにする。

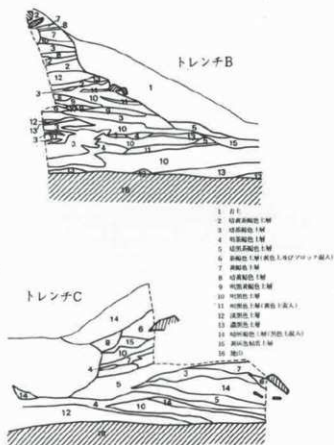
封土が確認できるのは、わずかに石室を覆う部分のみである。トレンチB・C（第9図）によって観察すると、黒色土・黄褐色土・茶褐色土とを基調とした土を互層に積み上げ、しっかりとした版築を施している。

古墳の東西断面を見ると、石室の中心から東約20mのところで周溝と思われる溝が確認された。一方南北断面（第3図）をみると、石室中心から北へ約18mのところ、及び南側では

石室中心から約15mのところと同様な落ち込みが検出されている。

これらの溝及び落ち込みは後円部の周溝と推定され、トレンチGにおいてくびれ部が検出された。この規模からすると、後円部の径は約32m余りとなろう。周溝の外壁は、トレンチ2及び3の2ヶ所で検出されているにすぎず、明確ではないが、その外縁まで含めると径約50mにもなると推定される。

トレンチAの周溝底部からは、家形埴輪・壺形埴輪・器片等を出し、埋土中から円筒・形象埴輪片等を出土している。トレンチC及びGでは円筒埴輪片が多量に出土した。

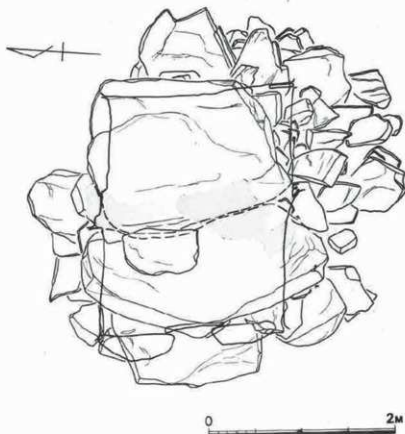


第9図 トレンチB・C地層断面図 (x0)

石室の築造に当っては、石室を築く位置に墓壇を浅く掘り、石室の構築と封土築成とを交互にくりかえしたものと思われ、封土は約14層からなっている。現状では、地山面から約1.8mの封土が残存するにすぎない。なお、石室の構築に際し、裏込め石等の使用は認められず、葦石などの外部施設の存在も認められなかった。しかし、トレンチAの周溝斜面に挙大の石が貼りついた状態が検出されているので（第3図）、築造当時は、葦石の施された可能性も考えられる。以上第1次調査の結果である。

第2次調査においては、前方部及び対峙するくびれ部の確認を主目的とした調査を行った。

トレンチL・O・P・R・Sによって前方部及びくびれ部の周溝の一部を検出した。トレンチL・Pにおける周溝は、後世の大溝によって切られた状態であったが、周溝底部より短甲・馬形及びその脚部・兜(?)といった形象埴輪が出土した。



第10図 石室平面実測図 (a)

前方部周溝のコーナー確認のためトレンチRを設定しているが、ここでは検出されず、家屋の下か、あるいはその北側あたりにコーナーがくるものと推定される。

トレンチGで確認された南側くびれ部に対峙する北側のくびれ部がトレンチSで検出されたが、周溝の外壁は墓地内となり確認できなかった。くびれ部の幅は約16m余りとなる。溝底部からは丹塗りの埴輪片等を出土している。

一方、トレンチOで確認された溝は、後世の溝等で攪乱を受けているが、前方部周溝の一部と考えられ、埋土中より須恵器構形甕や埴輪片等が出土した。

以上のことから、本古墳の規模を復元すると墳丘の全長約48m、後円部径約32m、くびれ部の巾約16m、単室の横穴式石室を内蔵する前方後円墳であると推定してはば誤まりないであろう。

(2) 石室の構造 (第10図・第11図)

内部主体は、主軸をN-87°6'-Eにとり、西に開口する全長2.75mの単室横穴式石室である。奥壁の位置は、墳丘中心になく、前方部に寄っている。

石室の構築は、わずかに地山を穿ち、まず奥壁に1枚の腰石・各側壁に2枚の腰石を立て、最後に各袖石を立てていく方法で、石室プランの基本を決している。奥壁より順序立てて構築したものであることは、奥壁と側壁間、側壁の2枚の腰石間、あるいは側壁と袖石間に隙間がみうけられないことから推定できる。

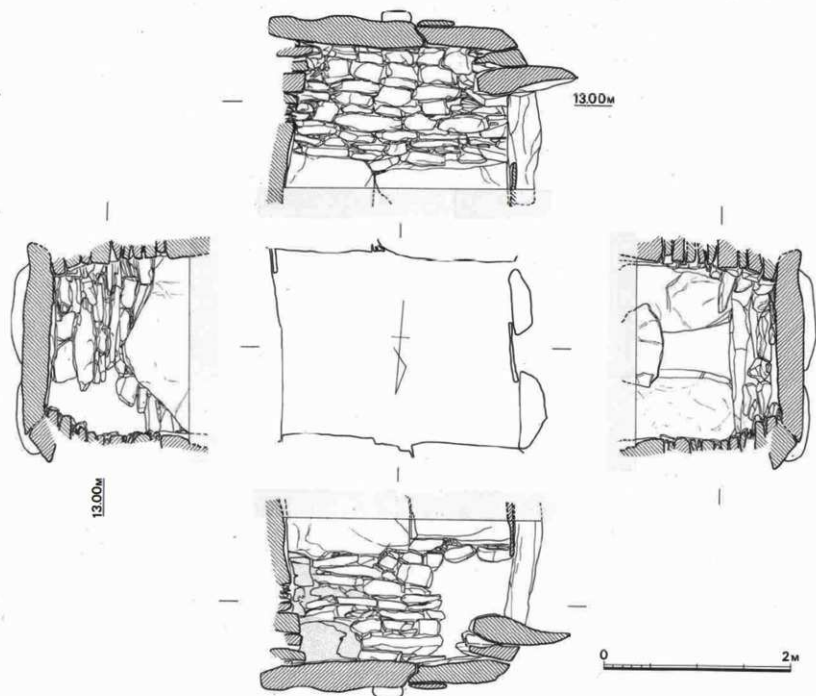
玄室の全長は2.4m、幅約1.95m、高さ約1.6mで、ほぼ正方形プランを呈している。玄室床面はすでに攪乱を受けていたが、一段深く掘り込み、割石を詰めて根固めした痕跡などは認められなかった。周壁は、割石及び自然石を小口積によって9～10段積み上げ、隙間に小塊石をさし込み、各壁ともわずかに持ち送りされている。田中幸夫氏及び佐田茂氏によると、各壁に2個の棒状突起が確認されているが、その後破壊され今回調査時においてはその痕跡すら確認できなかった。天井石は2枚の大石を使用し、わずかな隙間を80×50cmの小割石で覆い、粘土の目張りが施されている。

玄門の幅は40cm前後しかなく、入口には薄手の板石(85×55×5cm)を横に立て仕切り石としている。羨道部の存在の可能性も考えられたが、調査の結果羨道を持たないことが確認された。検出された列石は、土取りの時期、あるいはその後には置かれたものである。袖石と天井石との間には、大きな一枚石がはさまれ、前庭部に向って舌状に突き出している。この構造は極めて特異であって、本古墳の石室を特徴づけるものといえよう。

前庭部及び玄室内は、かなり攪乱を受け、墓道及び遺物はほとんど検出できない状態であった。わずかに、玄門前の攪乱土中から白玉4個(第19図)を検出したにすぎない。

(3) 本塚古墳推定復元 (第13図)

本古墳は前述のごとく封土がまったく失われており、現状で規模を推測することは困難で



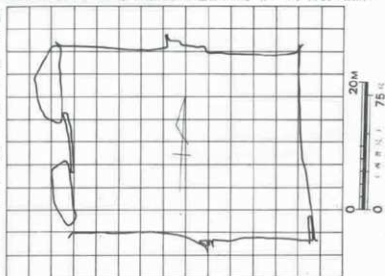
第11圖 木塚古墳石室実測図(40)

ある。従ってトレンチ調査によって確認されたわずかな周溝をもとに測定及び復元するほかはない。測定値は、周溝上面が削られている可能性が強く、おおまかな値で多少の誤差があるものと思われるが、

全長	米	秦漢尺	西晋尺	唐尺
	約 48 m	207.7	200 尺	161.6
後円部推定半径	約15.5m	67.0	64.5	52.1
くびれ部径	約14.5m	62.7	60.4	48.8

となり、使用尺度として西晋尺（1尺=24cm）が最もよく適合する。そこで、古墳の設計に関する關国男氏の所説にもとづいて考えて行くこととしたい。關氏は、前方後円墳にタテ・ヨコ十字形設計基準線を設定し、後円部と前方部がどのような関係を示すかによって三型設計に分類されている。

木塚古墳の後円部と前方部の関係は、確認された周溝からみて「仁



第12図 石室プランの方眼による操作結果(お)

徳陵型設計」といわれるものには適合せず、他の2設計の内どちらかだと思われる。使用尺度は西晋尺が最もよく適合する点から、「応神陵型設計」とも考えられるが、単純に確認されている前方部の溝を延長すると、全長の $\frac{1}{2}$ の線と後円部が接する点、いわゆるCDの点で後円部と前方部は結合せず、「応神陵設計」の大きな特徴を有しないことになる。そこで今1つの設計、「日葉酢媛型設計」の古墳であることが推定できる。

木塚古墳のそれぞれの関係値を測定すれば、墳丘長 $AB=48\text{m}$ （200尺、晋尺をもとにして、以下内じ）各方眼の単位は $\frac{AB}{8}=6\text{m}$ （25尺）、CDは4単位で24m（100尺）である。

ここで問題になるのは尺度である。「日葉酢媛型設計」では、主に秦・前漢尺（23.1cm）を使用しているが、木塚古墳では西晋尺使用の可能性が強い。そこで、設計比は「日葉酢媛設計」で、尺度は西晋尺を使用して築造された古墳を挙げると、崇神陵古墳があり、木塚古墳も同じような形態を示していると考ええる。

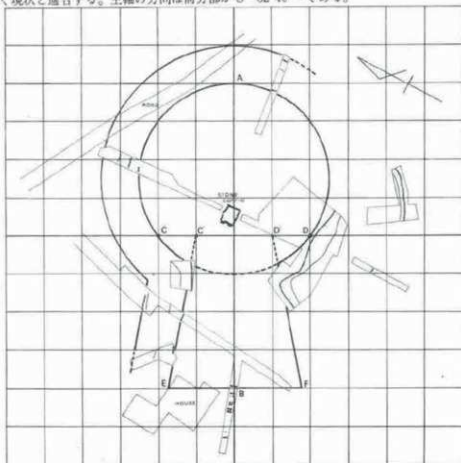
以上のごとく、木塚古墳の設計を推定して再び復元作業を行えば、設計比は崇神陵古墳

の8:4:3に近い8:4:3.5となる。前方部縁EFは3.5単位で21m(87.5尺)、CDは2単位の12m(50尺)となる。

周溝の幅については1単位が充られたとも考えられるが、そうすればトレンチ1及びP・Lでは適合するが、トレンチ2・3では若干の誤差を生ずるので、あるいは1.5単位であったのかも知れない。今後の検討が必要と思われる。

また、石室プランの方眼による操作の結果(第12図)によると、やはり24cmを1尺とする西晋尺が適合するようである。平面プランはもとより、各壁とも西晋を充てた方がより適合するようにみうけられる。従って、石室築造と盛土築成は内じ尺度を用いていることが指摘できよう。推定した墳形をあえて關氏の型式分類にあてはめると、「後円部が大きくなり、このため短くなった前方部を、幅と開きの増加によって補った設計型」といわれる「日葉酢媛型設計」の第2型式に相当すると考える。

このように關氏の前方便円墳の墳丘長を8分割し、それを設計の単位長とすれば、比較的よく現状と適合する。主軸の方向は前方部がS-62°40'である。



第13図 木塚古墳復元推定図(1/600)

木塚古墳出土の遺物

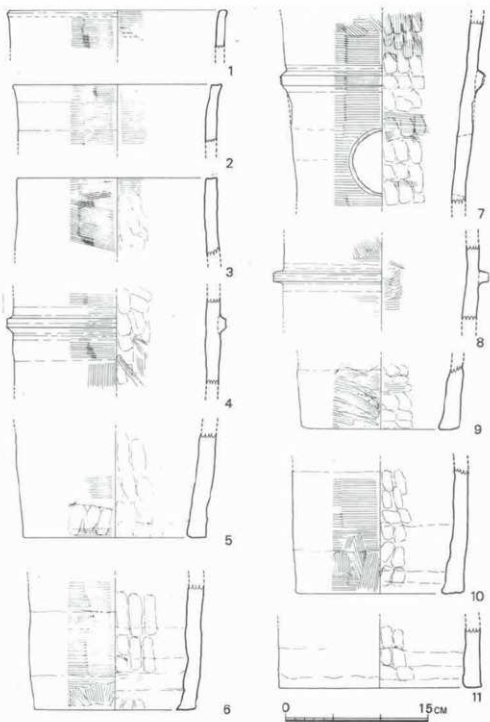
(1) 埴輪

かなりの埴輪片が出土しているが、図示できるものが限られるほど小片が多い。円筒埴輪が圧倒的に多く、朝顔型埴輪はまったく出土していない。器材埴輪は数点出土している。

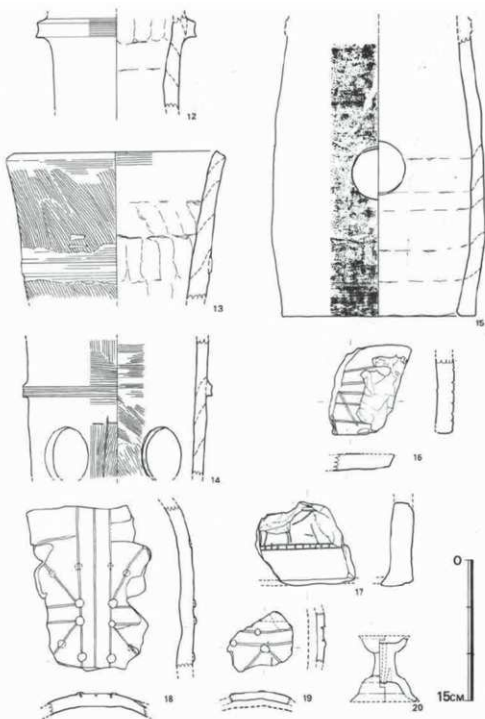
円筒埴輪 (第14図-1~11・第15図-13~15)

第14図の1、2、3の口径は23.2cm、2.2cm、21.2cmでほぼ直立している。口唇部の形態は多少異なり、1は丸味を持っているが、2、3は先端をおさえやや凹みを持たせている。2はやや外反気味である。内外面とも横ハケを施こし、3の内面に指ナデの跡が残る。4、7、8は蓋部の破片で、ほぼ同じ形態を示すが7の蓋がやや平たく幅を持っている。7の蓋の巾は1.9~1.0cm、その厚さ約0.6cm前後をはかる。外面は横ハケを主に部分的に縦ハケが施され、内面はナデによる調整が施され一部にハケ目の跡が見られる。8の蓋の巾は2.4~1.0cm、その厚さ約0.7cm前後をはかる。4・8はH型と思われるが、7はやや口縁部に向かって開ききみである。残存部下方に円形の透孔がみとめられる。外面は横ハケを施こし内面は指ナデによる調整である。色調は黄褐色を呈す。8の蓋の巾は1.5~0.8cm、その厚さ約1.0cm前後をはかる。外面は横ハケ、内面も部分的にハケ目を施こしている。色調は赤褐色を呈し、焼成、胎土とも良好である。5・6・9・10・11とも底部で、器壁は厚手で、ヘラ切りによる底面はしっかりとっている。内面は一般に接合痕が明瞭に認められる。9の外面はハケカキ状を呈しているが他は横ハケを施こし、下部は部分的に縦ハケが施されている。内面はナデによる調整であるが、接合痕の一部が消されず残っている。

13は、口径23.8cmを測り、やや下すばまりの異形を呈す。先端から11.3cmの所に第1般の蓋がめわり、巾は1.8cm~1.1cm、その厚さは0.3cm前後でかなり低い。内面に輪積みまたは巻き上げの痕跡が明瞭であり、3~4.5cmの粘土紐を用いている。外面は斜めハケ目を施こすが、蓋にかかる一部はすり消され、のち横ハケで調整している。色調は褐色を呈する。14は蓋の部分で、その巾は1.8~1.1cm、高さは0.6cm前後である。蓋の下に透孔がみられ、その横にはヘラ状工具による刻線が一本縦走している。透孔は、相反する面に2つ見られるもので、これは内外面の整形、調整後、ヘラ状工具によって円形に穿ったものである。内面には接合痕が一部に認められる。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。15は口縁部近くを欠損しているが、下半分にふくらみを有し、上部にいくにしたがってすばまっている。底部より30cmの高さまでタガがなく特徴的な形態を示す。底部から13cmのところに円形の透孔がある。内面下方に接合痕の一部が残り、外面は斜めまたは横にハケ目が施されている。輪積みの中は、2~4cmである。色調は淡黄色を呈し、焼成は良好である。



第14圖 埴輪実測図①(十)

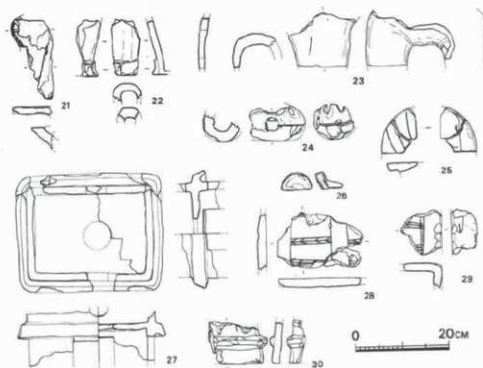


第15圖 埴輪実測図②(十)

通じてみたところ頂端、体部、底部の各列に形態上の差はほとんどみとめられないように思われる。多くが小片のため計測困難であったが底部について計測しえたものに関しては20cm以内で、それほど大きくない。破片の観察によれば、底部から上方にむかって非常にひらいたいわゆるV型のものはないようで、口縁部もまた第15図の13のように反りがひどくなく、直立ぎみのが主である。竈は何条めぐるか、小片のため不明である。透孔は円形のみである。表面の整形はハケ目でなされているが、第15図の14のようにきわめて細かいハケ目を施しているものはいちじるしく少ない。内面の整形は指尖でおこなったものと思われ、指痕の凸凹の認められるものが多い。いずれも底部を分厚くつくっている。

色は褐色と黄灰色の2類に大きく別けられる。土質はいずれも細粒を含んでいるが、個体間のいちじるしい差はみとめられない。焼成は色調と関連するが、一般に褐色のものほど堅くしまっており、黄灰色をおびたものは多く粗面を呈し、脆弱の傾向にある。

製作は、輪轆みまたは巻き上げと考えてよい。内面がよく整形されている類は、接合痕が完全に消されているが、多くは全体のほぼ上半分が丁寧に整調され、下半分は充分なされていない。そのため部分的に接合痕を残している。第15図の15はその好例である。透孔は筒部の整形を行なったのち穿孔したと考えられる。円筒植輪としてはかなり小形に属するものである。



第16図 植輪実測図③(十)

形象埴輪 (第15図・第16図)

すべて破片で周溝内出土である。家形埴輪、甲、冑、形象埴輪の破片が最も多く、鞍形、馬形、その他不明の形象埴輪片等も出土している。

12は円筒の形状を示しているが、おそらく形象埴輪の下部に付くものと思われる。残部の径は13.4~15cmを測り、箍が一糸めぐる。箍の中は2.3~1.7cmで、厚さは0.9cm前後である。内面に輪轆みの痕跡が残り、色調は淡白色を呈す。焼成は良好である。

鞍形 (17・21)

鞍形と考えられる。21は矢筈部側面から派生するひれの一部と思われる。端部には革とじの表現と思われる「X」字状の沈線が施され、二条の沈線2本真横に施している。裏面は外方にふくらむ。装飾の部分に朱がみられるが、本来は全面に朱塗りが施されていたと思われる。17は、基底部の破片と考えられ、表面には直弧文等が施されている。

甲形 (16・18・19)

三角鉄板剗鋸どめの短甲を表現したものである。18は胸部から腹部にかけての中央部である。19も脇のあたりのものであろう。草摺の小片も出土している。16 全体の大きさは不明。

残存部は18で17.5×11.5cm余を測る。器壁の厚みは1.5cm前後である。19は5.8×6.5cm 器壁の厚みは0.6cmを測る。全面に朱が施されていたと思われる。色調は赤褐色を呈する。

冑形 (20)

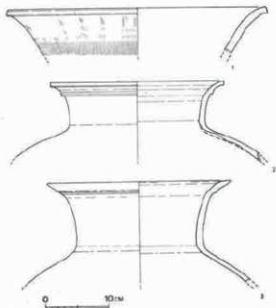
破片が数点出土しているが、頂部の立鼓形の装飾(立物)を図示した。出土した破片等をながめると、衝角付冑と考えてよいであろう。しかし、板付や衝角部は、小片のため詳細な形態は不明である。復元高約7cm、上部径6.5cm、下部径7.2cmを測る。他に鞍の破片も数点出土している。

馬形 (23・24)

24は、かなり破損しているが馬の顔面にあたる部分で、口と鼻孔が明瞭に認められる。左側面には轡の一部と思われる粘土板が貼り付けられている。口は、へう状工具で轡の間を描き、約1cmほど刻み込まれている。全面に朱塗りが施されたものと思われる。23は24のすぐ近くより出土している点などほぼ24の脚部としてまちがいないであろう。前肢の一部で、残存高は11.5cmである。色調は黄灰色を呈し、表面には朱塗の痕跡が認められる。

家形 (25~30)

25は破風と推定され、裏面は棟にのびようとするカーブがわずかに残る。表面には三本の沈線による曲線が認められる。残存高は約9.5cmを測るが、巾は不明である。全面に朱が施されている。26は、棟木と思われる。切妻造の両端につくものと考えられ、半円を呈し三角形とはならない。本来ならば、半円板だけを貼付けるのであろうが、ここでは補強のためか



第17図 須恵器実測図①(寸)

28・29は壁の破片である。沈線によって柱が表現され、その間に綾杉文が施されている。全面朱塗りである。

脚部 (22)

22は動物埴輪の脚部と思われる。基底部に粘土帯が貼り付けられ、面取りが施され、ひずめを表わしたものと考えられる。残存高約12cm、上端部での径は6.2cm、基底部は約5.2cmを測る。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含んでいる。焼成は良好である。

須恵器 (第17図・第18図)

第1次調査で出土した須恵器片は数点あるが、3点を図示しておく。(第17図) トレンチAの周溝内に集中して出土したものである。すべて壺形須恵器であり、他の器形はみうけられなかった。

1は口径48cmを測る。外反した壺口縁部の破片で口唇はややおさえられて突出している。色調は黄褐色を呈し、焼成は以外に不良である。外面は縦の刷毛目が施されているが、上部は横ナデによって消されている。

2・3は壺形土器である。2の口径は27.4cmを測る。ゆるやかにのびた肩部から頸部がほぼ垂直に近く立ち上がったのち外反する。外面に一条の山形突帯をめぐらし、口唇部端は軽くおさえられている。器壁はやや薄手であり、色調は黄灰色を呈し、胎土は良質で、焼成はやや不良である。

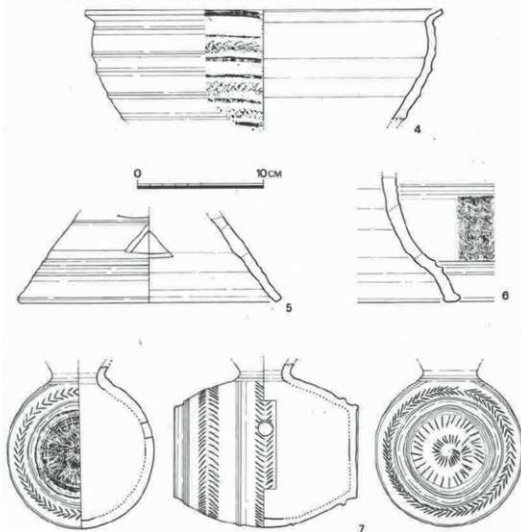
3の口径は29.2cmを測る。肩部の器壁はやや薄手で、頸部より口縁にかけて厚味を増す。

接合面を造り出している。

27・30は基底部である。27の裾廻突帯はL状に屈折張り出した形で、補強の支えなどは施されていない。柱の表現はなく、平部の突帯下に方形の窓、上方に円形の孔があげられている。二階建の倉庫を表現したもので、屋根は、群馬県、稲荷山古墳出土の家彩と同形態の寄棟造りとなるであろう。床面には円形孔が1個あげられている。平の長さは27cm、妻の長さは20.5cmを測る。30の裾廻突帯は断面台形を呈し、全面朱が施されている。屋根は切妻造と考えられる。

頸部は、ゆるやかな肩部からほぼ垂直に立ち上がったのち外反した口縁部に続く。頸部の立ち上りが著しく高い。口縁外面は山形突帯が1条めぐらされ口唇部は押えることなく、丸く収められている。ちなみに口縁部の高さは約11cmあり、2と基本的には類似した形態であるが、著しく異なった印象を与える。山形突帯は明瞭でなく、かなり丸味をおびている。口縁部は横ナデによる調整を施し、肩部の外面は斜めに浅いタタキが施され、内面には青海波文が施されていたと思われるが、指ナデによって丁寧にすり消し調整されている。色調は暗青灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。第2次調査で出土した須恵器（第18図）もすべて破片である。数点出土したが、図示できる4点についてのべる。4～6はトレンチL出土、7はトレンチO出土である。

4～6は器台の一部であり、6は小形器台の脚部と思われる。4は杯身片で、口径28.4cm



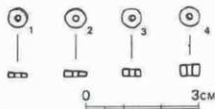
第18図 須高器実測図②(十)

残存高8.9cmを測る。体部は内湾しながら、口唇部で鋭く折れまがり先端は平坦に切られている。外面に5条の山形突帯がめぐり、5本を1組とした櫛描波状文が3条施されている。器壁は口縁部に近づくにつれてやや薄くなる。色調は外面黒灰色、内面灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。5・6とも器台の脚部で、5の残存径は20.8cm、残存高は6.9cmを測る。脚部先端は丸味をおびているが、やや方形に近い。裾部外面には巾広い突帯様の高まりがあり、2条の沈線が施されている。その上部には、三角形の透孔が上下に千鳥状に施こされている。色調は青灰色から灰色を呈し、焼成、胎土とも良質である。6は裾部においてやや湾曲しており、復元径は不明であるが、5より大形であることは確実で、あるいは4に伴うものとも考えられる。脚の先端はしっかりとしたつくりで裾部外面に2条の山形突帯がめぐらされている。最下段には6個の三角形の透孔を施し、上段にも千鳥状に三角形透孔が施されていたと思われる。透孔の間には10本一組の櫛描波状文が3条施されている。色調は灰色を呈し、胎土・焼成とも良質である。

7は樽形である。口縁部が欠損しているだけで他は完形である。胴部長径14.5cm、胴部短径11.6cmを測る。(側面径は7.2cm~7.3cmである)残存高は12.9cm、頸部径4.45cm~4.7cm、スカシ孔の径1.2cm、スカシ孔を中心とし左右に各一条の山形突帯がめぐり、突帯の右側にナデによる稜が走る。左右の側面の形態は多少異なっている。左側面は、わずかなふくらみを持ち、右側面はわずかにくぼんでいる。各側面端には1条の突帯状のものがめぐる。体部を側面から見ると円形を呈している。2条の山形突帯によって体部は三区に別けられ、その間「ハ」字形に櫛目による刺突文で裝飾される。両側面にも同様な刺突文が右回りの螺旋状に施されている。色調は黒灰色を呈し、胎土は石英、黒雲母等の小石を含むが、焼成とも良好である。

白玉 (第19図)

玄門前の擾乱土中からの出土で、すべて滑石製である。4はやや厚味を持っているが、他はかなり薄手である。1の径5mm、厚さ1.6mm~1mm、2の径5.8mm、厚さ1.9~1.1mm、3の径4.2mm、厚さ2mm、4の径5.2mm、厚さ3mmを測る。孔はすべて一方から開けられている。色調は1・2は乳灰色、3は灰褐色、4は暗灰褐色を呈する。また、他に鹿角製刀装具・玉等が出土していることが伝えられている。



第19図 白玉実測図 (3/4)

小 結

以上、調査結果を述べたが、本報告においては、紙副等の関係上調査の概要程度にとどめるを得ず、十分意をつくすことができなかった。

本古墳の時期については、石室及び出土遺物の詳しい検討を必要とするが、須恵器（特に樽形甕等）の出土からして中期後葉の時期に比定して大過あるまいと考える。

今後木塚古墳に遺された問題点として、①石室構造上の特異性及び年代等の詳しい検討②周溝の幅を含めた正確な規模の復元③本古墳の編年的位置づけの検討（筑後川左岸の低台地上に分布する古墳等の比較）④出土遺物、特に須恵器の問題（その編年的位置づけ及び移入経路等の検討）などが挙げられよう。これらの諸問題については、今後機会を改めて論じてゆくこととしたい。

註 (1) 『善導寺町誌』所収 昭和34年

(2) 佐田茂、『福岡県久留米市善導寺の木塚古墳』（九州考古49・50） 1974年

(3) 欄 国男 『古墳の設計』 1975年

(4) 田中幸夫氏蔵

3. 中 世

(1) 大溝 (第2図) (第20図)

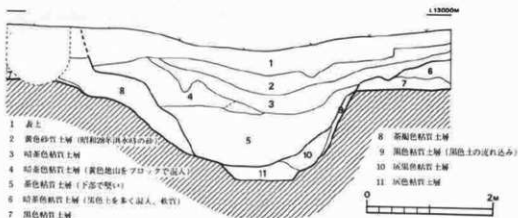
大溝は、屋根沿いに東西に走り、墓地付近から北東に屈折して東側端部に至る。大溝底部の標高からみると西から東に流れる。大溝の一部は古墳周溝を切っている。大溝の屈折も古墳の周溝にほぼ一致しており、古墳の形の規制を大きく受けている。土地の人は大溝を古墳周溝とみて、古墳の規模を80m前後と考えていたようである。大溝は昭和に入っても利用されていたらしく、いずれの部分でも大きく攪乱されているが、底部付近は攪乱を受けていない。底部中央には幅1.2m程の溝があり、いずれも北側壁は急な立ち上がりをみせる。

T-1では、北側から歪曲しながら流れ込む幅1m、深さ40cmの溝があり、大溝が排水用としても使用されていたと考えられる。だが、大溝の規模を復元してみると、幅約4m、深さ約2.2mあり尾根部を東西に横断し、常時においては満水する事もなく、埋土にも水湛が水した形跡はみられなく空濠の性格も考えられる。大溝付近に生活遺構、遺物が多いことも注意を要す。(第23図)

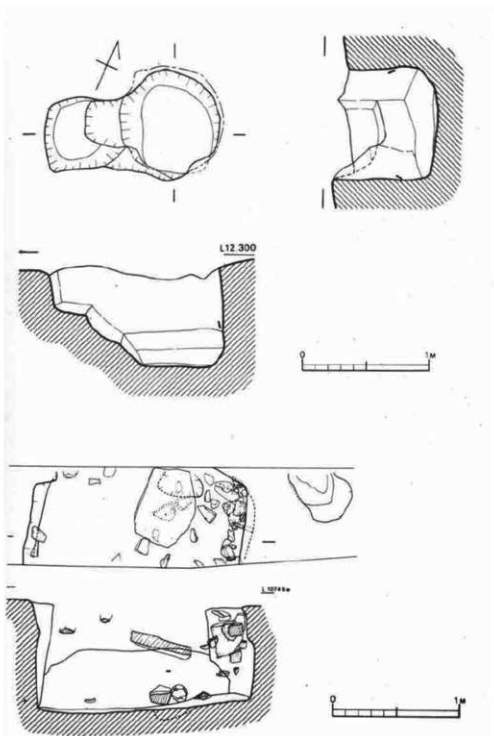
大溝底部埋土の出土遺物は瓦器片、青磁片で時期は鎌倉時代末から室町時代と考えられる。

出土遺物 (第30図36、第31図53)

53は白磁埴で推定口径17.6cm。灰色気味の化粧土の上に透明釉をかけ、口唇部に特に厚くかかる。口縁部がやや外反し、口唇部は平らで外側にややふくらむ。口縁部下に一条の低い隆帯がめぐられる。内面に櫛描文が施文される。



第12図 大溝土層図 (1/50)



第21圖 貯蔵穴1(上)、貯蔵穴2(下)(全)

36は瓦器境で推定口径17.2cm。器面は灰黒色で焼成は良好。口唇部は平らで、内側は丸く外側は斜めにヘラ研磨。口縁部下で1条の後縁ができる。

T-Oには、前方部周溝を再利用した室町時代と昭和初期の溝があり、周溝の痕跡はない。室町時代の溝は昭和初期の溝や井戸で削平されているが西壁は現存する。溝中の灰黒色粘質土層から瓦器と共に須恵器の樽形琺瑯が出土した。

遺構の規模、形状から溝と思われるが、狭いトレンチ内なので他遺構の可能性もある。(第4図)

(2)貯蔵穴1 (第21図)

上部は削平を受けているが、直径1.5m、最大径1.7m、底径1.3m、現存深さ1.5mの円形袋状貯蔵穴で底面は平坦である。袋部上部は崩壊しており埋土内に地山ブロックが多かった。南西部に40cmの段差があり、幅80cmの平坦面を持つ、ここが入口と考えられる。

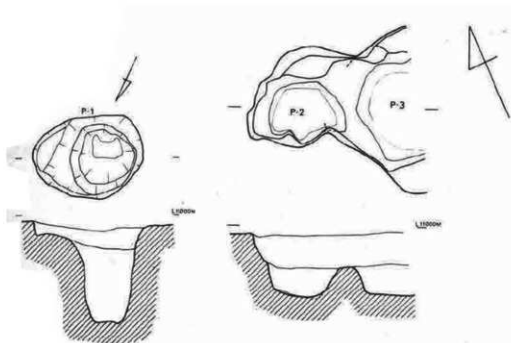
埋土内からは、羽釜、土鍋、黒色土器などが出土し、室町時代の貯蔵穴と考えられる。

出土遺物 (第32図70、71)

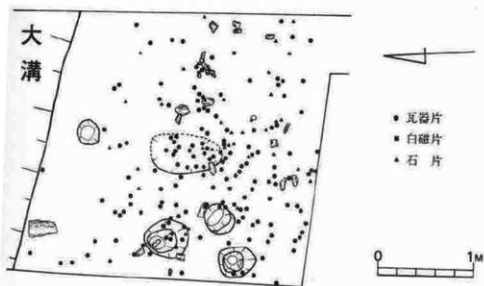
70は羽釜で口径30.4cm。口縁部下に13.8cm×2.6cmの角を対でとりつけ、径1.1cmの孔を5.1cmの間隔で穿つ。孔は外側から穿たれる。口縁部に粘土を貼りつけて肥厚させる。口縁部内側は刷毛調整であるが、外側はナデ調整で刷毛目痕は残らない。以下は調整が粗雑で凹凸がいちじるしく、ススが付着する。71は土鍋で推定口径32.0cm。口縁部は粘土を貼りつけて肥厚させナデ調整。それ以外は刷毛調整だが方向は一定していない。外側全面にススが付着する。内側は横方向の刷毛調整。黒色土器の高台部。胎土は砂粒をわずかに含む。高台断面は台形で、付近は横ナデ調整。

貯蔵穴2 (第21図)

T-Dの南側にあり、遺構の検出はトレンチ内にとどめた。プランは不明であるが、淵1.7mで西側はすぐ端になり東側にのびると思われる。北側壁は内側に弯曲をもち、壁が崩壊せぬように大小の石で止めている。床面は平坦で、中央部の北側よりに35×22×9cmの樽円形のビッドがみられ、その44cm直上に44×61cmの平石がある。埋土内から埴輪片などが出土したが、埋土の状態から室町時代の時期と考えられる。貯蔵穴として使用されたと思われる。



第22図 ピット1、2、3 (30)



第23図 T-Lの瓦器、青磁、白磁出土状態図 (30)

(3)柱穴、ビット群 (第22図、第23図)

T-I北側で黒色粘質土層を掘り込んだ灰色埋土のビットが3つある。ビット1は、直径1.2 m、底径40cm、深さ1.6 mの円形プランで北東側に平坦な面を持つ。埋土内から細片の瓦器片、土師器片が出土した。ビット2、3はビット2がビット3を切っている。いずれも底部は平坦で二段掘りしている。埋土内から土師器片が出土した。

T-Iの大溝南側、古墳周溝が埋った段階で堅く踏み固めた層がある。瓦器、青磁片、自然石が一面に散布し、4つのビットを検出した。ビットは、直径40cm、深さ53cmで二段掘りしたビットもあり柱穴と考えられるが、狭い範囲での発掘で規模、性格は不明。

出土遺物 (第30図2、28、32、第31図40)

2は小皿で口径 9.7cm、底径 7.0cm、器高 1.0cm。底部よりゆるやかに立ち上がり、深さはあまりない。明茶褐色を呈し、器面は内外とも横ナデで底面はヘラ削り。T-I、P-2内出土。

28、32、40は瓦器の高台付坑、土師器の小皿。40は断面三角形の高台がつき、底面は横ナデ、上部は研磨をしているようである。内側は横の研磨、胎土にわずかの細砂を含む。28は口縁部がやや外反し、先端は丸味をおびる。器壁は比較的うすく、内外共横の刷毛調整後に横の研磨をおこなっているが、外側の研磨は粗雑である。色調は明赤褐色で土師器的である。32はゆるやかに内弯し、先端部に横の刷毛目が一部に残るが、内外とも丁寧な横の研磨が施される。胎土は良好、色調は黄灰色で口縁部付近が灰黒色である。小皿は器高も低く平低から急に立ち上がる。口縁部は部厚く、ヘラ削りされているところが一部あり、外側に下がるような形である。胎土に少量の細砂を含み、色調は明茶褐色。

第Ⅳ章 出土遺物

1. 縄文式土器・石器 (第24図1～21・第25図)

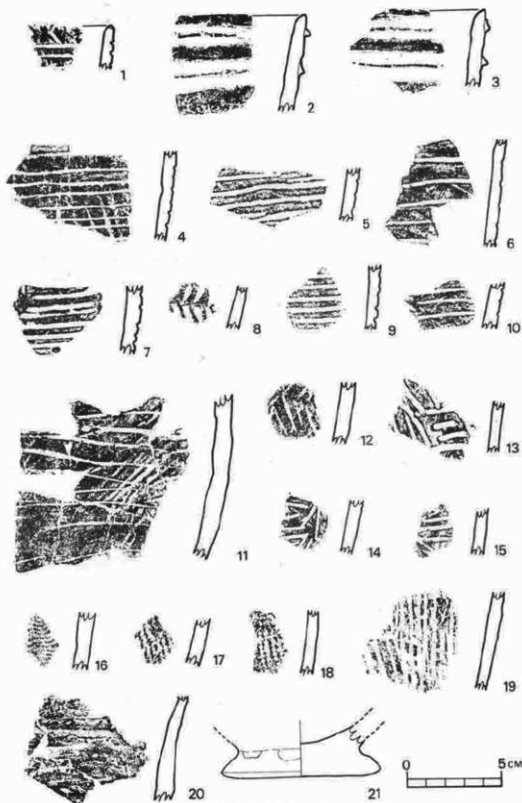
1. 4は胎土、焼成、文様から同一個体と考えられる。口縁部は直口し口唇部に刻目を施文。横沈線文は細い。内側はナデ調整で胎土に石英、金雲母を多く含む。2. 3は同一個体で口縁部に粘土紐の突帯を貼り付ける。突帯の断面形は三角形に作り出している。内側は貝殻条痕調整。焼成は堅密で色調は黄褐色。5は幅広い横沈線文で沈線に繊維痕がみられる。外側は全面にススが付着する。内側はナデ調整。6～10は滑石を胎土に含む、横沈線文を主体とした土器である。沈線文は深く明確で、8は口縁部下の羽状文であろう。焼成は堅密で調整も丁寧である。色調は褐色で一部に茶褐色もみられる。11はまとまった状態で出土した土器で、貝殻痕でナデ調整後に横沈線文を施文。下部はナデが丁寧である。外側全面に炭化物が付着する。内側は明確に貝殻条痕が残るが、上部はナデで消されている。接合部が明確に観察でき、胎土に黒雲母が多く他の土器と異っている。12～15は短い沈線で文様を構成する。12は羽状文と思われるが小片で明確でない。14は沈線文が細くて鋭く、色調は内外共に灰黒色で焼成も堅密。16は小片であるが、内側に条痕と異なる山形の押圧文様がみられる。胎土は砂粒を多く含む、焼成は軟弱で外側は磨滅がいちじるしい。色調は黒色。17. 18は熊糸文と思われるが磨耗がいちじるしく明確でない。19は外側を貝殻条痕で、内側はナデ調整。色調は内外ともに茶色。20は口縁部付近で、外側は条痕、内側はナデ調整。21は底部で底部付近まで丁寧な研磨がおこなわれる。指圧痕が接合部に残る。

2. 3は縄文時代前期の縄文式土器に相当する。1. 4～15は埴土式土器に相当すると思われるが、14だけは文様、胎土が他の土器と異なり他時期の可能性もある。16～19は押圧文に続く時期の土器と思われる。20. 21は縄文時代晩期の土器である。

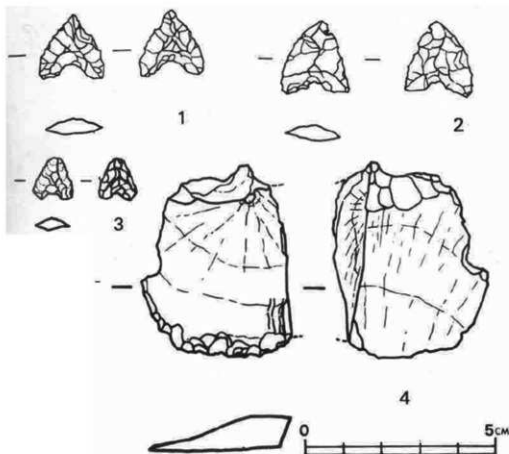
石器 (第25図1～4)

発掘による石器は少ないが、自然面を残す大きい石核や小さい剥片など50点近くが出土しており石器製作が近くで行なわれていたと思われる。石材は、黒曜石が多くサマカイト、安山岩などがある。

石核 (1～3) 1は黒曜石製、2. 3は粗悪な黒曜石製。1は両面とも丁寧な剥離が行なわれ、塊りも丁寧に作り出される。長さ 1.7cm、幅 1.7cm、重量0.73g。2は整形が雑で剥離も荒いが、



第24圖 繩文式土器(1/2)



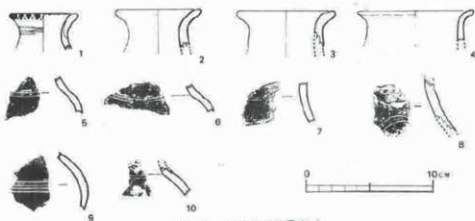
第25図 石器(十)

主要剥離面は残されていない。块りは他と比較して浅い。長さ 1.9cm、幅 1.8cm、重量1.22g。3点とも正三角形で基部に比較的浅い块りを持つ。1は、第1号石棺墓埋土内出土で弥生時代の墓制を作る時に曾畑式土器と共に削平され埋められたと考えられる。2、3は第1号土墳墓埋土内出土。搔器(4)サヌカイト製の横割ぎ搔器で半分に折損している。上部に打撃の為のフラットな面を作り、バルブ痕がみられる。B面には調整痕がある。剥離は下部端に一面だけに行なわれ刃部をつくり出す。古墳盛土出土。

2. 弥生式土器 (第26図～第29図)

小形壺形土器 (第26、27図 1～25)

1～4は外反する口縁部で、1、2はゆるやかに外反し、口径が小さく頸部がくびれる。



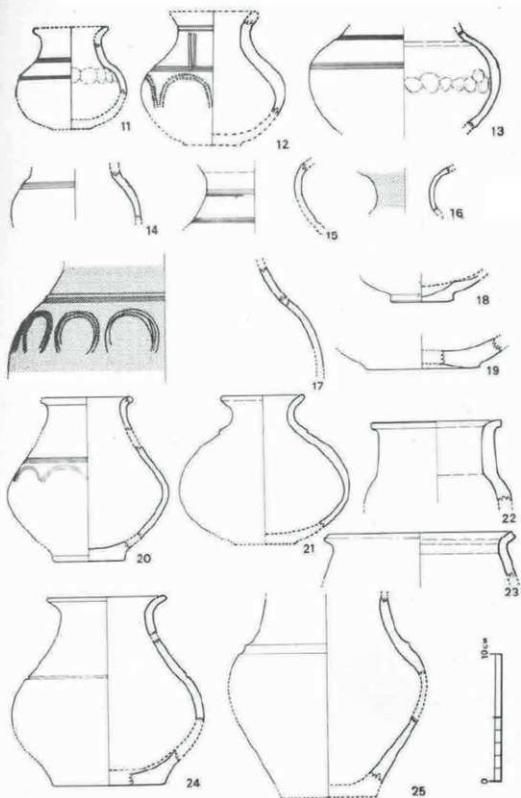
第26図 弥生式土器①(4)

3、4は口縁部が急に屈折し広口になり頸部がのびる。1は口縁部内外に赤と黒で交互に施文。調整は内外共に横研磨で仕上げる。4のみ外側は刷毛調整、その後内外をナデ調整、口縁部内側のみ横研磨である。調整方法が他と異なり器壁もうすい。焼成は良好で褐色、4は暗褐色。5～7は肩部に横位沈線文をめぐらし境とする。沈線は比較的細く形式化している。7は外側にススが付着。調整は外側は横研磨、内側は横ナデ。8は胴部上半部片で横位沈線下に重弧文を施文、沈線は他と比較して幅広い。9は胴部最大部に4本の沈線を上部に4重の貝殻重弧文を施文する。12と類似するが、施文方法が異なる。調整は、外側で丁寧な横研磨。10は肩部と胴部の境に2本の沈線を施文、その下に細い格子目状沈線文を施文。胎土は、5が金雲母を少量含むが、他は石英粒をわずかに含む良好な胎土。色調は茶褐色。

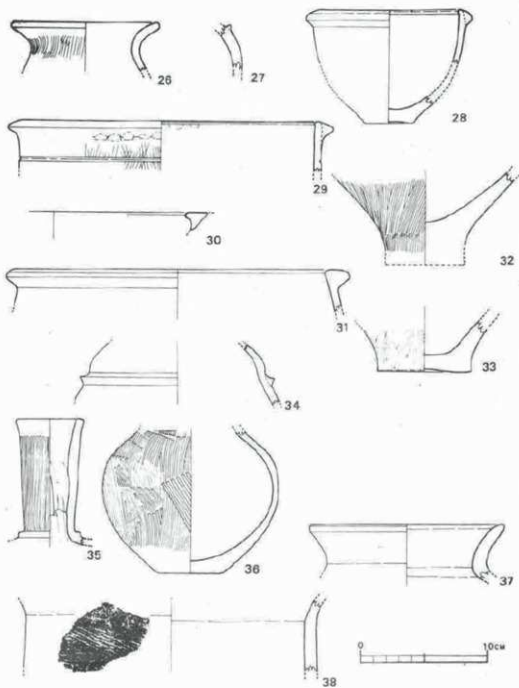
11～19は頸部と肩部の境が明確でなくなりなだらかに胴部となる。数本の沈線文で境をあらわす。内側接合部の稜は明確でないが、まだ指圧痕として残る。胴部は球状に近く最大径は上部にある。底部はやや上げ底気味で平坦にならない。11は胴部が強く張り頸部が立ち上がる。内側は指圧痕で稜を有する。12は口縁部下に2本、胴部に3本の横位沈線文を、その間の肩部に縦の4本の沈線文を施文し胴部に貝殻腹線部で2重の重弧文を8連施文。外側の研磨は非常に丁寧で赤褐色で呈する。13は最大径が中央部に下りややつぶれた感がある。中央部は器壁が厚く内側には指圧痕が残る。外側にススが付着する。第1号土壇墓内出土。16は頸部が強くくびれ、器壁が非常に薄く、外側は丹塗り。17は肩部に3本の沈線をめぐらし3重の重弧文は正円に近く、精密に描かれている。内側面ともへつ研磨で外側は丹塗り、第1号石棺墓内出土。

1～19は弥生時代前期後半に属すると考えられる。

20～25は口縁部が短く外反し、頸部、肩部の区別が明確でなくなり丸味をおびて胴部に至



第27圖 弥生式土器②(1/3)



第26圖 弥生式土器③(十)

る。胴部は最大径が中央部がそれより下になる。頸部と肩部の境には沈線か作り出しの凸帯をめぐらす。

20は口縁部は丸味を持ち、頸部と肩部の境も明確でなく、最大径は下位にあり全体としてくずれた感があるが、底部はまだ古い様相を残す。3本の沈線は深いが重弧文は簡単な線描きである。21は肩部に作り出しの突帯をめぐらし、胴部は上からつぶされたような器形である。22、23は頸が直立し、口縁部は急に屈折、口唇部で水平になり垂直に切り落している。胴部は口径よりわずかに出る程度であろう。調整は口縁部が横ナデで他は横研磨、胴部以下は縦研磨。色調は黒褐色、24は口径と底部径がほぼ等しく最大径が下位にあり安定感がある。

20～25は弥生時代前期末に属すると考えられる。

鉢形土器 (第28図28)

口縁部に三角突帯を貼り付けたやや深めの浅鉢で、内側は指で張り出しをつくる。底部はやや上げ底気味である。調整は内外共にナデ、焼成は軟弱で外側の剝落が著しい。

甕形土器 (第28図29～33)

29は口縁部に三角突帯を貼り付け、突帯を貼り付けた指痕が内外に残る。外側に刷毛目が一部残る。口縁部下には深い沈線を施文する。30は甕形土器の可能性もある。32、33は甕形土器の底部でやや上げ底気味で底部付近は縦の刷毛目痕がみられる。

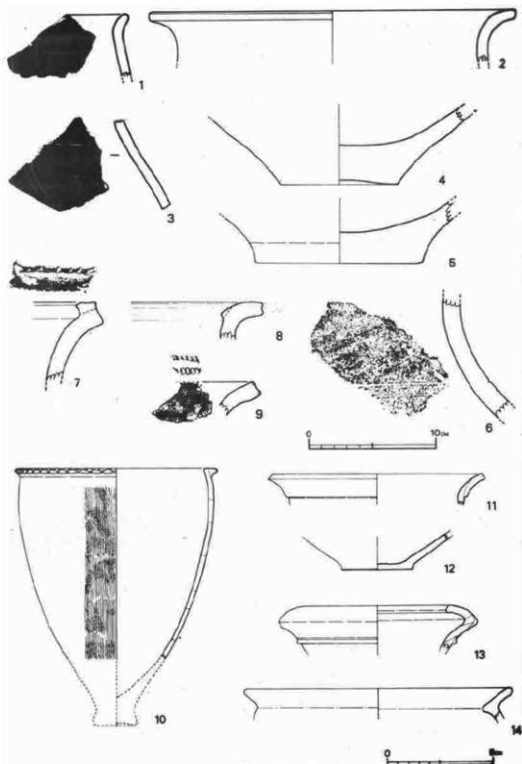
瓢形土器 (第28図34)

作り出しの鋭った三角突帯を肩部にめぐらせ、外側は刷毛調整後に丹塗り。内側は横ナデ調整で剝落が著しい。胎土は石英粒を多く含む焼成は良好。色調はおうど色。

26～29は中期前半に属し、30～33はやや後出すると考えられる。34は中期終末に属すると考えられるが後出するかもしれない。

壺形土器 (第28図35～36)

35は長頸壺形土器の口縁部で頸部は直立しやや外反する。口唇部は平坦となる。大きな縦の刷毛目痕が残る、一部にはヘラ調整した痕跡もある。内側にしぼり痕跡が残る。胎土は微砂を多く含む灰色で他の土器と異質である。口径4.5cm、頸部9.4cm。36は口縁部を欠くが完形に近い。胴部は球状に近く底部は比較的うすい。器壁は平底であるが肩部は丸味をわびる。調整は太めの刷毛で底部近くは細かい刷毛でおこなう。内側は接合部に指圧痕らしきものがあり、調整は上部で斜め、下部で縦のナデを行なう。最大径13.9cm、底部5.2cm、現存高11.3cm。



第29図 弥生式土器④(1/3)

変形土器 (第28図37、38)

37は口縁部が短く外反し、口唇部は指ナデ調整。内側の接合部で削りがみられる。胴部外側は全体にスガが付着し、火を受けてもろい。4つの土器が一括出土したが、もろくて復元不可能であった。

35、36は弥生時代後期前半、37、38は後期後半に属すると考えられる。長頸壺形土器の出土例は筑後地方では少なく、今後の研究に期待したい。

壺形土器 (第29図1～6、11～13)

1は頸部が内すばまりにのび短くなるが、2はゆるやかに如意形に外反する口縁部である。調整は内外ともによこ研磨。胴部は境に鋭い沈線を1本か2本めぐらし区画する。6は大きく胴部が張る。底部は4がやや上げ底気味である。4～6は壺棺と考えられる。調整は外側が口縁部から底部までいねいな横研磨である。11は12と同一個体で、口縁部は補強の為に肥厚し段を有する。口唇部は浅く窪み横ナデ調整。底部は平底であり肥厚しない。口縁部は横ナデだが、底部ではいねいなへら研磨調整、器面にヒビ割れがある。底面の内外、底面に炭化物が付着する。底面には靱痕1の他にワラ状の圧痕がある。13は推定口径22.4cmの袋状口縁部で、口縁部の製作方法が接口部から観察できる。口縁部下には三角突帯を貼り付ける。調整は外側が剝落の為に不明であるが、内側は横ナデ調整。壺棺に使用したと思われる。

変形土器 (第29図7～10、14)

7～9は金海式壺棺で、7は口縁部内側を肥厚させやや内傾する。口唇部は平坦になるがやや窪む。外側の刻み目は上端のみで下端にはみられない。調整は内外ともに横ナデ。8は外反した口縁部の内側に三角突帯を貼り付けるが、すでに口縁部一部となっている。口唇部はやや窪むが刻み目はみられない。7と8は組み合わせて用いられた可能性がある。9は外反する口縁部で、外側の上下端に刻み目を施文する。口唇部は研磨後に刻み目を上下別々に施文している。調整は内外ともに横研磨。10は推定口径35.0cmで底部を欠く、外側は輪積み痕が明確に観察され、縦の刷毛目痕は輪積みごとにおこなわれる。刷毛調整後に突帯を口縁部に貼り付け、突帯を上下から押える為やや波状を呈する。突帯下は横ナデ調整。内側は薄く化粧粘土をしている。口縁部下5～6cmはそれ以下の指ナデと異なるナデ調整。外側にはスガが付着する。14は口縁部が逆L字形をなし、粘土接合部で凹凸となる。胎土に金雲母を含む。

1～14は遺跡の性格から埋葬に使用したと思われるが、遺構から出土したものではなく、すべて擾乱層出土。10～12のように内外面に炭化物やスガが付着した土器もあり、日常品からの転用が考えられる。時期は1～6、11、12は前期後半、7～9は前期末、10は中期初頭、13、14は中期後半に属すると考えられる。

4. 中世の遺物

ここでは中世を中心とした遺物について述べる。特記すべきまとまった資料もなく、紙数の上から実測可能資料の3分の1程度しか記載できない。そこで類似資料中の比較的好資料と類別が他にない資料を中心とし、資料紹介に留めた。また近世以降の資料は、全て割愛した。詳細は全て表に譲り、各種土器について補足的説明を加えたい。なお表の単位はcmで表わし、推定値は全て()で括った。

○小皿 篋切り離し底(篋切り底)と糸切り離し底(糸切り底)とあり、概略前者が4類(1・2、3、4、15)、後者が量的に圧倒的に多く6類(5・6、7・8、9・10、11・12、13、14)に分類できる。ただそれぞれの中にも微妙な差異があり、さらに詳細な検討が必要であろう。

○杯 全体を知りうる資料は僅か1例しかなく、底部の小片が大多数を占める。篋切り底が1類(16)、糸切り底が4類(17・18、19、20、21、22)に分類しうる。

○碗 土師器、黒色土器、瓦器がある。それぞれ器形上の差異もあるが、胎土・整形・張り付け高台であること等、三者に共通する点もある。土師器は口唇部が丸く厚くなり外反する傾向にある。これは瓦器には見られず、高台が台形状であることと共に黒色土器に近い。内黒土師器もあるが好資料がない。瓦器の口縁は口唇部が平坦、尖る、丸いの3種に分類でき、高台は方形、台形、六角形、三角形の4種に分類できる。

○磁器 出土遺物中白磁が最も多い。蓋物、碗、皿がある。図示していないが、玉縁が極めて薄いものがある。52は他に比し後出的である。青磁は碗のみで、図示していない小片の中に蓮華文を隔刻した竜泉窯系青磁がある。64は高台に特徴があり、華南地方産の青磁らしい。

○日用雑器 捏鉢には土師、瓦器、須恵質の3種がある。中でも土師質の土器が多い。襷鉢と共に表面に煤が付着した例が多く、土鍋に転用されることが多かったと思われる。土鍋はかなり多量に出土したが全て三角形突唇を有する例だけで、他の器形はなかった。把手付きのものが2個分出土した。湯釜は土師質と瓦器質とがあり、5個分程が出土した。石鍋は鈎付きのものの出土がなかった。大甕は破片数は割に多いが、図示できるものが少ない。体部が厚いものと薄いものがあった。滑石製分銅は珍らしい出土例であるが、土器との共伴関係は不明で時期の限定ができない。破損したために破棄されたものであろう。

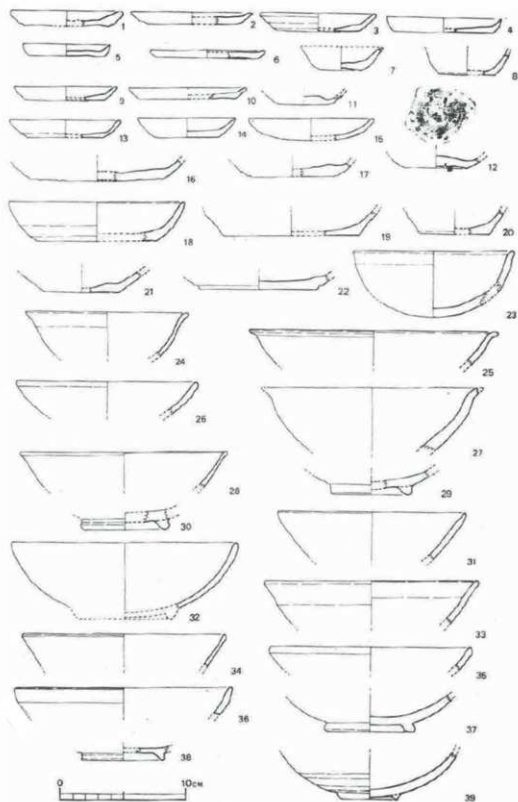
以上の遺物がどのように組合わされるのか、筆者にはわからない。ただ、平安時代から室町時代頃までの、日常生活に用いたものであろうと言えるのみである。各資料の詳細な検討は今後の課題として機会を得れば分析を試みたい。

(1)

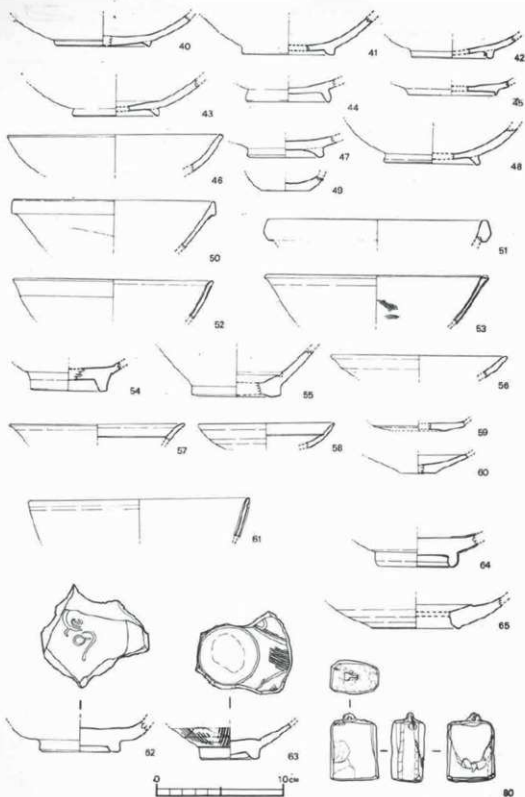
- 51 -

(1)

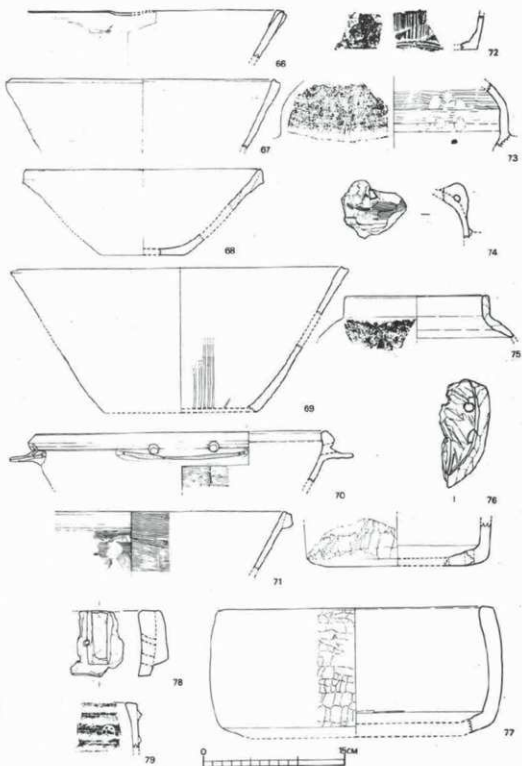
—52—



第30圖 中世遺物①(土)



第31図 中世遺物②(十)



第32圖 中世遺物③(1/3)

第V章 ま と め

以上のように木塚遺跡は、遺構の確認だけでも弥生時代前期の墳墓、古墳時代の前方後円墳、中世の大溝、貯蔵穴、柱穴を検出しており3つの時代の複合遺跡である。他にもローム中出土の加工痕のある石器、縄文時代前期の曾畑式土器片・石鏃、平安時代末の土師器皿、江戸時代の小皿、土鍋などが出土しており、生活の跡は古く、また多くなると考えられる。このように残世代にもわたって生活、墳墓に利用されたのは、この地が平野部に小高くつくられた自然堤防の台地でも高い場所にあるという地理的条件からであろう。

第2次調査で予定していた先土器時代の遺物包含層の確認は遺跡保存の方針で実施できなかった。今後の問題として残しておく。縄文時代前期曾畑式土器は市内の政所遺跡、横道遺跡、吉井町の法華原遺跡で確認されている。後期、晩期の土器片も数片あり、筑後川の河口部に面した台地上をどのように利用していたかは今後の課題となるであろう。ただ、黒曜石の大剥片やチップが約70点出土したことは興味深い。

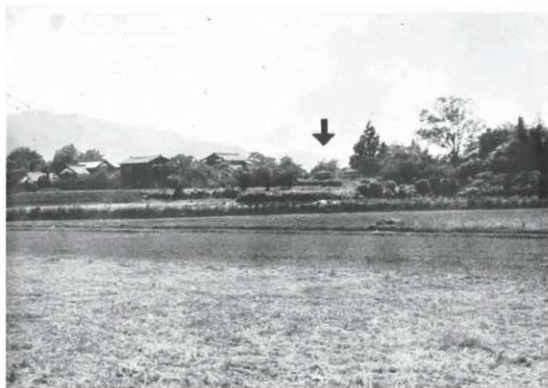
弥生時代前期後半の墳墓は、筑後地方の現在知られている遺跡では最も古い。特に丹彩の羽状文土器は古い様相を残している。木棺墓、壘棺墓なども前期末から中期中葉にかけての時期であろう。自然堤防上に立地した前期の遺跡は今後の弥生時代研究に好資料となるであろう。最近の発掘で東櫛原町今寺遺跡から前期後半の円形住居地が発見されている。平野部に突出した洪積台地に立地した遺跡である。筑後川をはさんで久留米市と小都市の遺跡では様相が異なり、小都市の津古内畑遺跡等は福岡平野の影響が強いが、久留米市の弥生遺跡では中部九州の影響がみられ筑後川が古代の交流において障害になっていたと考えられる。

木塚古墳は今回の発掘で、その規模がほぼ解明できた。筑後川の自然堤防上に形成された木塚古墳は、古墳の立地としては平野部の小高いところで遠望もきき、周辺からでもすぐ見える絶好の位置にある。石室内の副葬品は盗掘の為に明らかでない。周溝内から数多くの形象埴輪、器台が出土していることから墳丘部の景観を推察できる。耳納山地北麓の平野部で確認されている前方後円墳は、久留米市京町の日輪寺古墳が西端であるが、洪積台地上に位置している。自然堤防上に立地した前方後円墳で横口式石室を有する吉井町の塚堂古墳との関連性は今後の検討を要するであろう。横口式石室についても今後の研究テーマとなるであろう。

中世になると生活遺構の柱穴、貯蔵穴などがあり、尾根部に大溝がはしる。出土遺物からみて鎌倉時代末から室町時代にかけての時期である。対岸の草野氏菩提寺である井上山普尊寺の建立が鎌倉時代初めであり、境内からは珠光青磁なども出土している。大溝の性格と共に中世の木塚については今後の資料、文献等の研究が課題となるであろう。

圖

版



1. 木塚遺跡遠景、矢印下が石室(北東から)



2. 木塚遺跡近景(南東から)



1. 第1号土墳墓(南西から)



2. 第1号土墳墓完掘(北東から)



1. 第1号木棺墓、掘り込み確認(北から)



2. 第1号木棺墓完掘(北から)



1. 第1号石棺墓(南から)



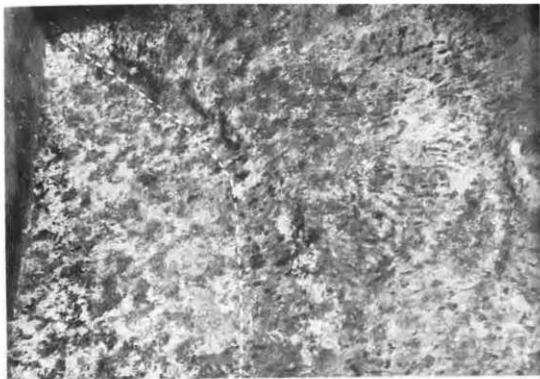
2. 第2号(石蓋)石棺墓(南から)



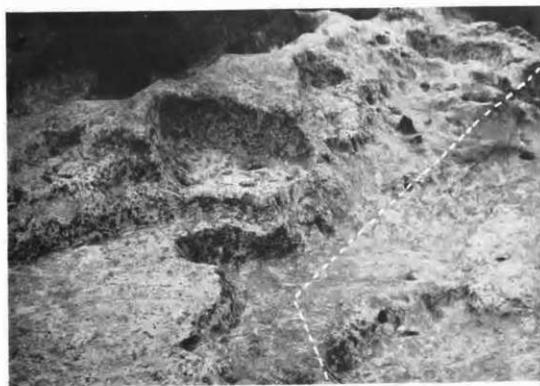
1. 木塚古墳石室(西から)



2. 木塚古墳石室(南から)



1. T-S、北側くびれ部(西から)



2. T-G、南側くびれ部 土墳墓で攪乱(西から)



1. T-A、後円部周溝、窠形埴輪、須恵器出土状態(北から)



2. T-P、前方部周溝、武人、馬埴輪出土状態(北から)



1. T-M、後円部周溝と中世貯蔵穴(北から)



2. T-L、前方部周溝と中世大溝(北から)



1. T-L. 前方部周溝と中世大溝の切り合い(南西から)



2. T-L. 大溝中の昭和年代の溝(西から)



1. T-L、大溝に流れこむ溝(北から)



2. T-L、ピット、柱穴(東から)



1. T-O、中世包含層出土の樽形甕(東から)



2. 樽形甕



1. T-1、中世大溝と昭和年代の大土壙(北から)



2. T-1、昭和年代の大土壙(南から)



1. 第1号土坟墓



4. 第4、5号土坟墓



2. 第2号土坟墓



5. 第6号土坟墓



3. 第3号土坟墓



6. 第8号土坟墓



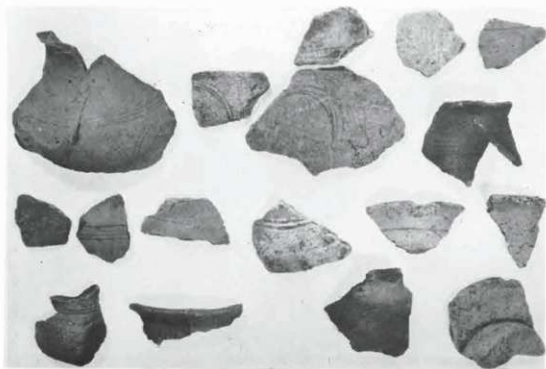
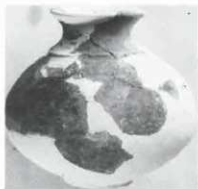
1. 木塚遺跡出土縄文式土器



1. 木塚遺跡出土の石器、石片



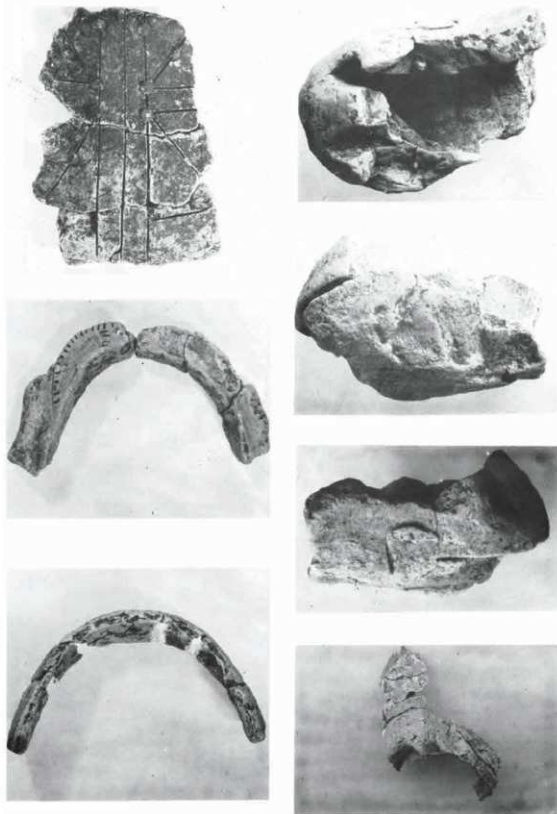
2. 第1号土壌墓出土の弥生式土器



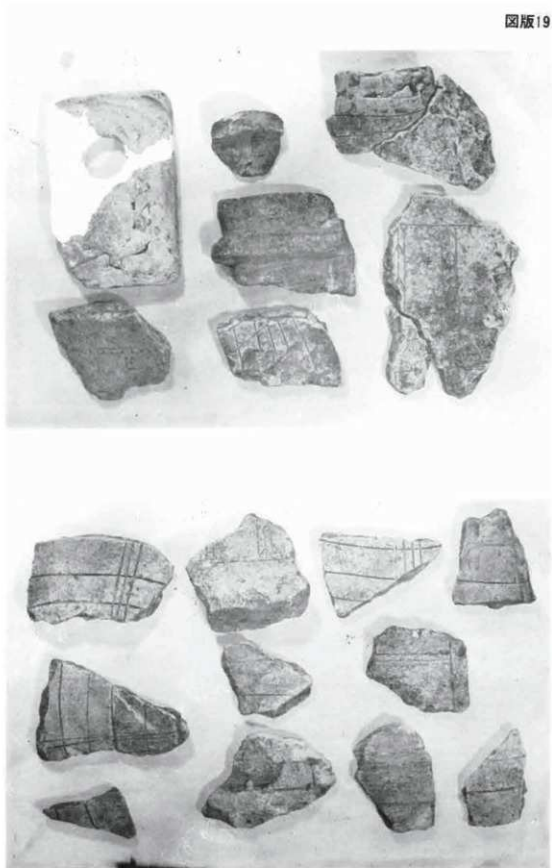
1. 木塚遺跡出土の弥生式土器



1. 木塚遺跡出土の弥生式土器



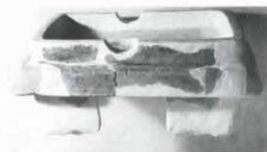
1. 木塚古墳周溝出土の形象道輪



1. 木塚古墳周溝出土の形象埴輪



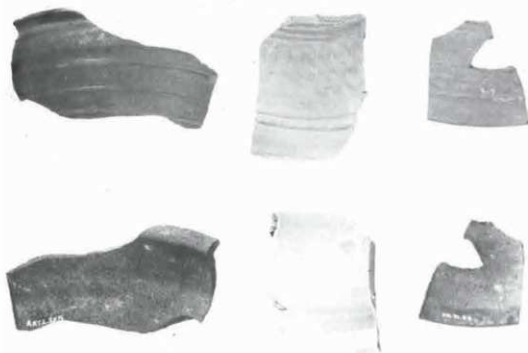
1. 木塚古墳出土形象埴輪(田中幸夫氏、浮羽高校蔵)



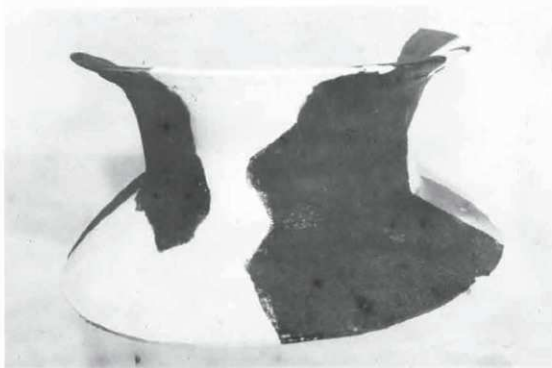
2. T-A、周溝出土の家形埴輪



3. 木塚古墳周溝出土の特殊埴輪



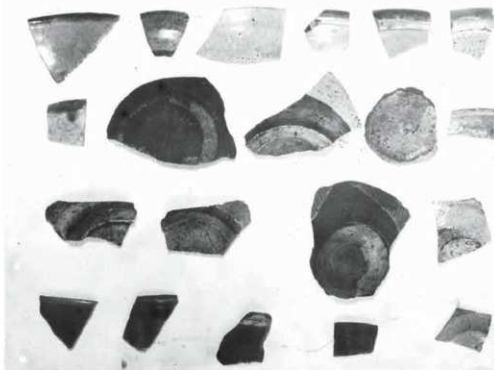
1. 須恵器、器台



2. 須恵器、壺



1. 分銅と石鍋片



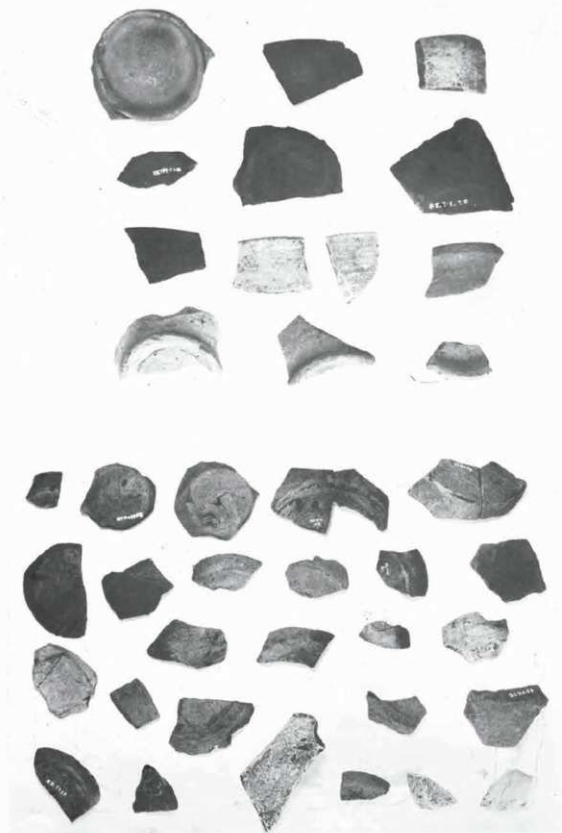
2. 白磁、青磁



1. 瓦器



2. 雜器



1. 小皿

久留米市文化財調査報告書 第14集

昭和52年3月31日

発行 久留米市教育委員会
久留米市城南町15-3

印刷 信和プリント社
久留米市中央町27-13